

イタリア語イタリア文学

LINGUA E LETTERATURA ITALIANA
(Facoltà di Lettere, Università di Tokyo)

IV

2008

東京大学大学院人文社会系研究科
南欧語南欧文学研究室紀要

目次 Indice

2001 年度 論文

Una tradizione: viso - riso - Paradiso (K. Ura)	-----	1
---	-------	---

2007 年度 論文

3 fonti di Giacomo da Lentini: Andreas Capellanus, Jaufre Rudel e leggenda tristaniana (K. Ura)	-----	29
浦 一章 ジャコモ・ダ・レンティーニにおけるマクロテスト	----	47
浦 一章 文学史のために——2つの覚書——	-----	161
古田 耕史 レオパルディのロマン主義的自然観 ——スタール夫人との関係を中心に——	-----	245

資料紹介・翻訳

チャールズ・S・シングルトン 『キタ・ノワ』試論 第2章 (浦一章 訳)	-----	293
---	-------	-----

投稿規定	-----	341
------	-------	-----

文学史のために——2つの覚書¹⁾

浦 一章

1. 失われた鎖の目

ジャコモ・ダ・レンティーニのカンツォーネ *Uno disio d'amore sovente* を詩人の他の作品、とりわけ *Amor è un[ò] desio* や *S'io doglio*、*Dal core mi vene* と結びつけながら読み解く作業の結果、拙論「ジャコモ・ダ・レンティーニにおけるマクロテキスト」が明らかにしたのは、ジャコモがジャウフレ・ルデルに向かって意識的に対抗的な態度をとり、アンドレアス・カペラーヌスを自らの理論的支柱としていることであつた。実際にはいまだ会つたこともないトリポリ伯爵夫人に恋し、彼女の姿を自らの目で見ると十字軍となり海を渡つたジャウフレは、彼女の姿を見えなくしている「距離」(*lontananza*) という問題に直面していた。ジャコモもやはり同じ障害に衝きあたつたが、この詩人の場合は、相思相愛で結ばれた婦人(言い換えれば、すでに何度も姿を享受している恋人)との別れが「距離」を生む原因であつた。ジャウフレの詩的世界が基本的に「いまだ獲得されざる眺め」(*vista mai avuta*) に特徴づけられているとすれば、ジャコモの詩的世界の少なくとも一部は「失われし眺め」(*vista perduta*) を構成原理としている。この対照関係は、より包括的な視点に立てば、一方(ジャウフレ)の「片思いの恋」(「伝記」によれば、その恋が報われ成就するのは詩人の死の直前の一瞬である)、他方(ジャコモ)の「成就した恋」(しかし、その恋は別離によって危機に瀕する)と、容易に書き換えることができる。

成就がおぼつかない「片思いの恋」とすでに「成就した恋」を喪失するこ

とでは、どちらがより大きな苦しみをもたらすであろうか。このような問い——いや、時代を考慮すれば、「パルティメン」(partimens、相反する選択肢が示され、選んだ立場を弁護してゆく、ディベート式の詩的遊戯)と言う方がより適切であろう——を想定すれば、ジャコモがジャウフレとは反対の選択肢をとり対抗的な詩的世界を構築していることはより明確になろう。だが、恋愛に関する21の裁定(扱われている問題の多くは二者択一の形式に書き換えることができる)を収録したアンドレアス『宮廷風恋愛について』第2巻7章²⁾は、「片思いの恋」と「成就した恋」を天秤にかける上のような問いを含んでいない。アンドレアスの著作のうち、そのような「パルティメン」を生みだしうる可能性を秘めているのは、筆者の見落としがなければ、第1巻冒頭に掲げられた「恋愛の定義」の直後に置かれた一節(前掲拙論第3章で紹介)のみである。冒頭のきわめて近くという場所の意義は、この一節がアンドレアスの著作を手にとった読者の多くの目にとまらなかったはずはないという意味合いにおいて、しかるべく強調しておかねばならないが、そこでアンドレアスは、「片思いの恋」も「成就した恋」もともに苦しみをもたらすものだとして、「すでに獲得したものを失う方が、期待しているだけの富をなくすより辛いことだ」として、「成就した恋」を失うことがより大きな苦しみを惹きおこすとの立場を示していた。それでも、『宮廷風恋愛について』の誰か読者がアンドレアスのこの見解に疑念を抱けば、問題の一節を二者択一の「パルティメン」に書き換えて、他人の意見を求めることは可能であつたらう。そうした意味合いでは、あの一節は潜在的な「パルティメン」だったと見なしてよい。アンドレアスの一節が顕在的な「パルティメン」に書き換えられた実例は、ボッカッチョ『フィローコロ』第4巻に含まれた総数13の「恋愛問題」(questioni d'amore)のうち2番目のものであろう³⁾。そこでは、嘆き悲しむ2人の姉妹が登場する。一方の悲しみは恋が成就し肉体的にも結ばれたが、恋人が罪を犯して追放された結果、相思相愛が1ヶ月も続かぬうちに別離の憂き目に遭ったことに由来し、他方のそれは

互いに心が通じ合った2人であるにもかかわらず、さまざまな障害に阻まれて肉体的結合を達成できないことに由来している。2人の姉妹の縁者にあたる男性が彼女たちの嘆きを聞きつけ訳を質し、どちらの方がより大きな悲しみか（女王役のフィアンメッタに対して）裁定を仰ぐ展開にはいささか不自然なものを感じられるし、裁定者に向けられる質問もアンドレアスの一節から直接に派生しうるものとは微妙に異なっている。だが、そうした軽微な変更は小説的な虚構の中では常に許され見出されるものであろう。より興味深いのは、女王がアンドレアスに沿う形で裁定を下し、すでに獲得された幸福を失った彼女の方がより大きな悲しみを味わうとしている点である。このようなアンドレアスとの明確な符合にもかかわらず、『フィローコロ』と『宮廷風恋愛について』の一節との連関をライナが少しも指摘していないのは奇妙と言わざるをえない⁴⁾。その原因は、すでに述べたように、『宮廷風恋愛について』の恋愛裁定集たる第2巻7章にはこの「恋愛問題」が含まれてはおらず、ただ冒頭近くの一節に潜在的な形で宿っているのみだという事実求められるのかもしれない。モンドドーリ版『フィローコロ』に付された註釈はライナの研究に言及してその成果を採り入れてはいるが、やはりアンドレアスには触れていない⁵⁾。また、リッチャルディ版およびリッツォーリ版『フィローコロ』の註釈は語義の解説に限定されているためであろうか、類似した先行「パルティメン」に関する情報は一切あたえてくれない⁶⁾。

『フィローコロ』の第2「恋愛問題」がアンドレアスを材源として活用しているとしても⁷⁾、もちろん、そのことは『宮廷風恋愛について』の隠れた「パルティメン」を顕在化した最初の者という栄誉をボッカッチョに授けるものではない。ジャコモに視線を返すならば、彼とその周囲をとり巻く詩人たちが持った文化的活動の場において、アンドレアスとジャウフレを複合しながら新たな「恋愛問題」が生みだされつつあった情景がほの見えてくる。「片思いの恋」と「成就した恋」を比較する問いはそうして生みだされた「恋愛問題」の一例であるが、愛の発生過程を論じたジャコモのソネット *Amor*

è un[o] desio の背後にも、別の「恋愛問題」の存在が感じられる。それは、「視覚に基づく恋と基づかない恋では、どちらがより大きな情念を惹きおこするか」というような問いであったに違いない。ジャコモはジャウフレの「見ずの恋」の可能性をまったく否定してしまうわけではないが、より大きな情念を惹きおこすのは視覚に基づく恋だとして、アンドレアスの立場を支持していた。ジャコモの文化環境（そこには、*Amor è un[o] desio* が書かれる契機をあたえた2人の詩人、ヤコポ・モスタッチおよびピエル・デッラ・ヴィツィニャが少なくとも確実に属していたであろう）から『フィローコロ』のボッカッチョへとつながる連鎖。この鎖の中で、あまり注目されてこなかった目に照明をあてることがこの小論の目的である。

*

若きダンテがダンテ・ダ・マイアーノとの間に交わした「テンツォーネ」(tenzone)——韻文(多くはソネット)による議論——の1つは、5つのソネットから構成されており、「恋愛における最大の苦しみとは何か」を論じているため「愛の苦しみ」(duol d'amore)と呼ぶことが慣用化している。この「テンツォーネ」を伝える写本は現在まで発見されておらず、『ジュンティ版古歌集』(Giuntina di rime antiche)と呼び慣わされている1527年の刊本が最古の証言である⁸⁾。『ジュンティ版古歌集』は最初と最後のソネットをダ・マイアーノ(M)に帰し、間に挟まれた3つのソネットをすべてアリギエーリ(A)に帰している(M-A-A-A-M)。この作品帰属では内容が不整合になるので、5つのうち中間に位置する3番目の作品、すなわち *Lo vostro fermo dir* の書き出しで始まるソネットの帰属が誤っており、ダ・マイアーノの作と改め、議論・対話はM-A-M-A-Mの順序で展開したとする見方がある一方で、『ジュンティ版古歌集』の作品帰属を大きく見直し、A-M-A-M-Aの順序でソネットが交わされたとする立場もある(後者の見方では、『ジュンティ版古歌集』の作品帰属は *Lo vostro fermo dir* に関してのみ正しいことになる)⁹⁾。ここでこの目的は作品帰属の問題に決定的な解決をもたらすことではなく、アンドレ

アスおよびジャコモとボッカッチョをつなぐ中間項を見出すことにあるので、*Lo vostro fermo dir* が少なくとも若き日のダンテ・アリギエーリの周辺で詠まれたという事実だけで十分であろう。「恋愛における最大の苦しみとは何か」と問題提起をする第1ソネットに対して、「私が知る限り、恋する者がもし愛し返されないならば、確かにその者は心に比類のない苦しみを宿すと思われます」¹⁰⁾ という回答をするのが第2ソネットであるが、この先行ソネットへの反論として書かれたのが第3ソネット *Lo vostro fermo dir* である。先行ソネット（第2ソネット）の回答は、言い換えるならば、「片思いの恋」が恋愛における最大の苦しみであるとするものにほかならないが、これに対する反論を *Lo vostro fermo dir* の後半6行が次のように表現している。

Dite ch'amare e non essere amato
 ène lo dol che più d'Amore dole,
 e manti dicono che più v'ha dol maggio:
 onde umil prego non vi sia disgrato
 vostro saver che chiari ancor, se vole,
 se 'l vero, o no, di ciò mi mostra saggio.¹¹⁾

あなたは愛しながら愛し返されないことが愛のもっとも悲しい苦しみだと仰います。しかし、もっと大きな悲しみがあると多くの人が述べております。それゆえ、どうかお気を悪くなさらぬよう、へりくだって懇願する次第です。もしお気に召すなら、賢明なるあなたはさらにお明かしてください。この件に関する体験がおりになって私に真理をお示しになっているのでしょうか、どうなのでしょう。

反論者は、「片思いの恋」にまさる大きな悲しみがあると多くの者が述べているとしているが、このより大きな悲しみが具体的には何であり、また「多くの者」とは誰なのかを第3ソネットは全体14行にわたる展開の中で少しも明らかにしていない。ソネットの註釈者らのうちでは、唯一バルビおよびマッジーニのみがこの問題に若干の関心を寄せ、「多くの者」が反論を正当化するための虚構という側面を持つ一方で、恋愛を論じた多くの作家たち

が「恋愛における最大の苦しみとは何か」に類した多くの問題を実際に扱っていたとし、そうした作家たちの例としてアンドレアスの名前を挙げている¹²⁾。実際、「恋愛における最大の苦しみとは何か」のような問題がアンドレアス的な心性と合致することは（少なくとも『宮廷風恋愛について』第2巻7章の読者には）容易に分かることであり、そのことにはモンタナーリも言及している¹³⁾。だが、バルビもマッジーニもモンタナーリも、「片思いの恋」にまさる大きな苦しみは何でありうるのか、ひとつの可能な答えさえ示唆していないのである。また、彼らはアンドレアスの名前を挙げても、『宮廷風恋愛について』のどの箇所が「愛の苦しみ」と名づけられたこの「テンツォーネ」に影響しているのか具体的な指摘は一切していない。それは『宮廷風恋愛について』の冒頭近くに置かれた一節が潜在的な「パルティメン」であることが見落とされた結果であり、その一節がジャコモともボッカッチョとも関連していることが見抜かれなかったことの帰結である。彼らがそのことに気づいていたなら、「片思いの恋」にまさる大きな苦しみとは、たとえば、すでに「成就した恋」を失う苦しみだと指摘しえたであろう。

もっとも、バルビらの目に『宮廷風恋愛について』の一節とのつながりを見えにくくする要因は「テンツォーネ」の後続の展開自体の中にもあったと言えるかもしれない。第3ソネットの詠み手は、「片思いの恋」より「もっと大きな悲しみ」(più ... dol maggio) と単数で述べて二者択一の「パルティメン」の構成を準備しつつあるのに対して、この構築されつつある軌道の上を第4ソネットは少しも走らないからである。第3ソネットが描きつつある「パルティメン」に回答者が気づかなかつたにせよ、あるいは意識的に無視したせよ、第4ソネットの詠み手は「もっと大きな悲しみ」とは何なのか少しも尋ねようとはせず、恋愛におけるすべての苦しみは「片思い」に由来すると自らの体験に照らして断言する。「成就した恋」を失う悲しみのような、「片思い」とは異なる苦しみには一瞥さえ投げられていないのである。そうした意味合いにおいて、「愛の苦しみ」は選択肢を提示しない議論形式「テ

ンツォーネ」として始まり、途中から選択肢を提示する「パルティメン」形式に移行しようとしながら果たせなかった論争と言えるかもしれない¹⁴⁾。

Amico (certo sonde, acciò ch'amato
per amore aggio), sacci ben, chi ama,
se non è amato, lo maggior dol porta;
ché tal dolor ten sotto suo camato
tutti altri, e capo di ciascun si chiama:
da ciò ven quanta pena Amore porta.¹⁵⁾

友よ——私はほんとうに愛情をこめて愛したことがあるから、その点は確かだ——愛する者が愛し返されないなら、もっとも大きな苦しみを味わうことになる、しっかりとわきまえておくがよい。この苦しみが他のすべての悲しみを自らの王笏の下にしたがえ、すべての悲しみの王と呼ばれている。この苦しみに、愛がもたらすすべての苦しみは由来するからなのだ。

このような断言に満足せず（それは、裏返せば、第4ソネットの詠み手の「体験」だけでは十分な説得力とはならないとの意味にほかならない）、さらに説明を求めるのが第5ソネットであるが、これに対する回答は伝わっておらず、「テンツォーネ」は結末が不明のまま中断している。第5ソネットの興味深い点は、第4ソネットの詠み手に対して、自らの視点を支える「典拠」(auctoritas)の提示を請求していることであろう。第5ソネットの詠み手はすでに*Lo vostro fermo dir*において「多くの者」の見解に言及し、自分を支持してくれる「典拠」の存在を暗示していたが、相手には「典拠」があるのかと質すわけである。「多くの者」という誇張・虚構にもかかわらず、*Lo vostro fermo dir*の「典拠」はアンドレアス『宮廷風恋愛について』の冒頭近くの一節にほかならないというのが本稿のテーゼであるが、幻の第6ソネットが「典拠」を明示していたなら、矛盾する「典拠」間の調停というスコラ哲学的な展開へとつながっていたであろうか、あるいは調停が難航し（恋愛評定によくあるように）誰か第三者に裁決が委ねられたであろうか。今日の

読者は結末をただ夢想してみるのみである。

Però pregh'eo ch'argomentiate, saggio,
d'autorità mostrando ciò che porta
di voi la 'mpresa, acciò che sia più chiara;
e poi parrà, parlando di ciò, chiara,
quale più chiarirem dol pena porta,
d'ello assegnando, amico, prov'e saggio.¹⁶⁾

それゆえ、賢明なるお方よ、懇願いたしましょう。あなたのご説を支えるもの（＝根拠）を「典拠」（＝信頼のおける権威ある書物）から明示しながらご議論くださいと。そうすれば、あなたのご説も今以上に輝きを発することになりましょう。そして、その議論を通じてあなたのご説が揺るぎないものとなった後で、友よ、どの苦しみが最大の悲しみをもたらすか、証拠と実例を示しながら決めるといたしましょう。

*

1998年に復刊された研究において、ライナはアンドレアス『宮廷風恋愛について』の13、14世紀イタリアにおける普及を跡づけながら、カヴァンルカンティやチーノ・ダ・ピストイアにはアンドレアスおよびその著作への直接的な言及が見られるのに対して、ダンテ・アリギエーリには見当たらないとしている。それでもライナは、カヴァンルカンティやチーノの近くに位置していたアリギエーリがアンドレアスの著作に触れえなかったとは考えにくいとし、アリギエーリの死に際して詠まれたピエラッチョ・テダルディ（Pieraccio Tedaldi）のソネットの一節を、あたかも間接証言・状況証拠のように、引用している¹⁷⁾。

..... più copioso in iscienza
che Catone, Donato, o ver Gualtieri.

カトーやドナートゥス、アンドレアスよりも学識に満ちた……

因みに、アンドレアスは友人グアルテリウス [Gualterius (lat.); Gualtiero (it.)]

のために指南書として『宮廷風恋愛について』を著わしたが¹⁸⁾、書物の受け手の名前が夙に著者名や書物名の代わりに用いられていた(“Gualtieri”はラテン語の呼格“Gualteri”に由来する形であろう)。

この小論はアンドレアスからジャコモ・ダ・レンティーニ、ボッカッチョへとつらなる鎖の1つの目として、ダ・マイアーノとアリギエーリの間に関わされたテンツォーネ「愛の苦しみ」を読み解く試みであったが、この試みが説得的であったならば、ライナの見解は明らかに修正されねばなるまい。ソネット *Lo vostro fermo dir* の作者がアリギエーリなのかダ・マイアーノなのかによって修正の度合いが微妙に変化するとしても。

2. ギニツェッリのシチリア派的側面

生きた2人の人物が交際する場合、付き合いが長くなるにつれて、2人の関係はさまざまに変化する可能性を含んでいる。当初は明らかでなかった、相手の性格の側面が状況の変化とともに次第に開示されてゆき、それにつれてこの人物に対する見方も修正されてゆくことになるからである。その結果、交際の密度や性格も変化し、以前は頻繁に話題となった人物が今ではあまり口に上らなくなる(あるいはその逆の)ような事態が出来したり、交際相手の変更されたりする。交際する2人の関係が大きく変化するとすれば、それは刻一刻と変わる状況下の2人がまさに生きて今も変成の途上にあるためであろう。これに対して、ある決まった著作を通じて故人と語らう場合には、変化してゆくのは読者である「私」のみであり、山の姿も視点が変われば変わるという意味合いでは見方も変わりうるが、先の場合のような大きな変化を経験することがそう頻繁にあるとは思われない。これに類したことが、ダンテにおいても観察される。ダンテが直接に交際し、ソネットを書き送り合った「第一の友」カヴァルカンティは、『キタ・ノワ』では特別の読者として想定されているだけでなく¹⁹⁾、修辞の合理的使用という「詩法」に関する事柄については大切な共通認識を有した者として言及されている²⁰⁾が、『俗

『俗語詩論』ではダンテの重要な同志としての役割を担うのはカヴァルカンティというよりも、むしろチーノ・ダ・ピストイアである²¹⁾。『キタ・ノワ』から『俗語詩論』へと時が推移する中で、カヴァルカンティとダンテの関係が必ずしも波乱のない穏やかなものでなかったことは確実であろう。いかなる状況で詠まれたのか、詳細は判然としていないが、カヴァルカンティはソネット *I' vegno 'l giorno*²²⁾ を書き送り、ダンテのもの考え方や（その反映としての）作品に不満の意を表明しているからである²³⁾。また、ダンテがフィレンツェ政庁の最高職にまで昇りつめたまさにその時期（1300年6月16日-8月15日）に、黒派と白派が武力衝突し、両派のリーダー格が8名ずつ追放に処せられたが、この時追放された白派の有力者カヴァルカンティの処遇にダンテが関わらざるをえなかったという複雑な事情もある。しかしながら、カヴァルカンティからチーノへの交替の大きな原因は、『俗語詩論』執筆の段階ではカヴァルカンティがすでに故人となっていたことであろう（死も交際に大きな影響をあたえる変化のひとつである）。カヴァルカンティは流刑地にて病（マラリア？）を得たと推定されおり、フィレンツェへの帰還を許されて間もない1300年8月29日に他界したが、1304年頃ダンテが『俗語詩論』に着手した時には、かつての「第一の友」はもはや状況に対して働きかける、生きた現実的な力にはなりえなかったのである。したがって、詩の最高の形式たるカンツォーネにふさわしい3つの主題（戦い、愛、徳）のうち、『俗語詩論』が徳の詩人としてダンテ本人を挙げる一方で、愛の詩人としてカヴァルカンティではなくチーノを挙げるのも当然と言える²⁴⁾。「光彩を放つ俗語」(vulgare illustre) —— 『俗語詩論』第1巻の主題がまさにこれである——という共通の理想のために、ダンテはチーノとならば詩作を通じて活動をともにすることができたからである。しかしながら、チーノとの交際も（ダンテの死にいたるまで続いたとはいえ²⁵⁾）常に静穏に展開したわけではなかった。「恋愛詩人」チーノの移り気な多情さをたしなめながらダンテは次のようなソネットを書き送っているからである。ソネットの受け手

の名前 (Cino) と「鉤」(uncino) ——まさに心をとらえる異性の魅力を表わすものにほかならず、日本語ならば「魚」=男を釣るための「針」とでも言い換えられよう——を脚韻によって結び合わせる、ダンテの皮肉な意図に留意されたい²⁶⁾。

Io mi credea del tutto esser partito
da queste nostre rime, messer Cino,
ché si conviene omai altro cammino
a la mia nave più lungi dal lito;
ma perch' i' ho di voi più volte udito
che pigliar vi lasciate a ogni uncino,
piacemi di prestare un pocolino
a questa penna lo stancato dito.

Chi s'innamora sì come voi fate,
or qua or là, e sé lega e dissolve,
mostra ch' Amor leggermente il saetti.
Però, se leggier cor così vi volve,
priego che con virtù il correggiate,
sì che s'accordi i fatti a' dolci detti.²⁷⁾

チーノ殿、われらのこうした詩から自分はすっかり遠ざかったもの
とっておりました。岸から遠く離れた私の船には、もう別の航路が
ふさわしいからです。しかし、どんな鉤にもあなたが簡単に引っかつ
てしまうと頻繁に聞かされましたので、疲れた手にほんの少しだけこ
の筆をとろうと思いました。

あなたのように、今はこちら今はあちらで恋に陥り、縛られたり解
かれたりする者があるなら、この者に愛神の矢がほんのかすり傷しか
負わせていないことは明白です。だから、移り気な心のせいであなた
が風見鶏のようになさるのなら、どうぞ徳をもってその心を改めにな
り、美しい詩に行かないが対応するようになさってください。

カヴァルカンティやチーノとのダンテの交際には、このように、時にす
きま風が吹き抜けていったが、これとは対照的なのがグイニツェッリと
ダンテの関係である。愛と高貴な心関係を論じた『キタ・ノワ』第19章

所収のソネット *Amore e 'l core gentil* では、グイニツェッリの実名は挙げられていないが、「賢者」(saggio) のカンツォーネ *Al cor gentil rempaira sempre amore* への言及と肯定的な評価が読みとられる。他方、やはり高貴さとは何かを論じた『饗宴』第4巻20章7では、同じカンツォーネが今度は「かの高貴なグイド・グイニツェッリ」(quel nobile Guido Guinizzelli) の作として明確に示されている。天の恩恵として与えられる「高貴さ」を宿しうするためには「魂」(anima) はそれに足るだけの完全な状態になければならないとする『饗宴』の議論は、実際、星から降り注ぐ不思議な力を宿すために寶石が満たしていなければならない条件を論じた、*Al cor gentil* の第2聯を下敷きに行っている。このカンツォーネは『俗語詩論』(第1巻9章3、第2巻5章4)において2度も肯定的に引用されているが、グイニツェッリ自身も「俗語詩に関する見識に満ちた、卓越した巨匠たち」(doctores ... illustres et vulgarium discretione repleti) (=ボローニャ出身の秀逸な何人かの詩人たち)の中で「最大のグイド」(maximus Guido) として惜しみなく賞賛されている²⁸⁾。『神曲』では、周知のように、「地獄篇」第5歌100でフランチェスカの口に与えられた「高貴な心にすばやく燃え広がる愛」(Amor, ch'al cor gentil ratto s'apprende) が、グイニツェッリの前述カンツォーネの書き出しと、『饗宴』ですでに利用した同じカンツォーネの第2聯の書き出し「愛の炎は高貴な心に燃え上がる」(Foco d'amore in gentil cor s'apprende) の組み合わせとして成り立っている。だが、これらすべてを凌ぐグイニツェッリに対する最高の賛辞は、「煉獄篇」のやはり有名な一節(第26歌112-14)において、主人公ダンテが口にする台詞であろう。

E io a lui: -- Li dolci detti vostri,
che, quanto durerà l'uso moderno,
faranno cari ancora i loro incostri.

そこで私は彼(=グイニツェッリ)に答えた、「あなたの優美なる詩が原因です。俗語を用いる今の習慣が続く限り、あなたの詩は紙価を

も高めることでしょう」と。

だが、ダンテがこのように常に高く評価し続けたグイニツェッリ²⁹⁾は彼と直接交際することはなかった。グイニツェッリを「わが父にして、かつて甘美にして優雅なる愛の歌を詠んで私を凌駕した他の詩人たちの父祖なる者」³⁰⁾と呼んで憚らないダンテであるが、煉獄第7台で出会った時、グイニツェッリ本人が名を明かすまでダンテは彼をそれと認識することができないでいるからである。伝記的に考えても、グイニツェッリが亡くなった1276年にはダンテはまだ11歳の少年にすぎず、両者の交流は想定しがたい³¹⁾。

ダンテがグイニツェッリをただ作品を通じてのみ知っていた。このことは、小さいながら、決して軽視されてはならない事実である。グイニツェッリに与えられた、ダンテおよび彼に勝る恋愛詩人たちの「父祖」という文学史上の位置づけは、ボナジュンタの口を通してダンテに与えられる位置づけ（「煉獄篇」第24歌49-62）——カンツォーネ *Donne ch'avete intelletto d'amore*（『キタ・ノワ』第19章所収）をもって恋愛詩の新たな境地を拓き、ジャコモ・ダ・レンティーニ、グイットーネおよびボナジュンタなど、過去の世代の詩人たちを凌駕した者としてのダンテ——と結びつく時、グイニツェッリにいわゆる「新優美体」（*Dolce Stil Nuovo*）の先駆者としての榮譽を授けることになる。そのような視座をダンテが構築したのは、ただ文書＝書かれた作品を読むことによってなのである。ダンテはどのような作品をどのように関連づけながら読み解くことによって自らの文学史観を形成したのであるうか。ダンテの思考回路を復元する興味深い試み³²⁾に本格的にとり組むことは別の機会に委ねたいが、ダンテが参照した史料の中にボナジュンタの次のソネットが含まれていたことは確実であろう。「煉獄篇」のボナジュンタがダンテを「新しい詩歌を引きだした」（*fore / trasse le nove rime*）者として（第24歌49-50）のは、このソネットの末行に着想を得た表現と思わ

れるからである。

Voi, ch'avete mutata la mainera
de li plagenti ditti de l'amore
de la forma dell'essere là dov'era,
per avansare ogn'altro trovatore,
avete fatto como la lumera,
ch'a le scure partite dà sprendore,
ma non quine ove luce l'alta spera,
la quale avansa e passa di chiarore.

Così passate voi di sottigliansa,
e non si può trovar chi ben ispogna,
cotant'è iscura vostra parlatura.
Ed è tenuta gran dissimigliansa,
ancor che 'l senno vegna da Bologna,
traier canson per forsa di scrittura.³³⁾

あなたは、ほかのあらゆる詩人たちを凌駕するために、恋愛の美しい詩歌の文体を変え、そのかつての「存在形態」から遠ざけてしまわれた。そんなあなたは、暗い場所に光をもたらず灯りのように振舞われたが、明るさの点で勝る高き太陽が輝いているここにおいては、そうではありませんでした。

あなたは煩瑣な議論によってかくも抜きん出ておられるから、十分説明してくれる者も見つかりません。あなたの言説はそれほどまでに晦渋なのです。学理はボローニャから到来するとしても、書物から無理やり詩を捻り出すとは、たいそう奇妙なことだと思われています。

「ここ」(quine) とはどこなのか(ボナジュンタの出身地ルッカ? トスカーナ地方?)、「高き太陽」(alta spera) とは誰あるいは何を意味するものなのか(グイットーネ? キアロー・ダヴァンツァーティ? ボナジュンタ本人?)³⁴⁾、またボナジュンタが批判の矛先を向けているグイニツェッリの作品は何か、等々。細部の具体的理解が必ずしも容易ではないソネットであるが、そこ(とくに冒頭4行)においてボナジュンタがグイニツェッリによって導入された「革新」について語っていることには注目しておかねばなるまい。

「革新」について語っていればこそ、ダンテはボナジュンタを「煉獄篇」第24歌において「旧世代」の代表として登場させたのであろう。ボナジュンタがグイニツェッリのどの作品を念頭に置きながら批判のソネットを詠んだにせよ、ダンテが *Al cor gentil* を常に尊敬をもって扱っていることに鑑みれば、彼がこのカンツォーネと結び合わせながらボナジュンタのソネットを読み解いた可能性は大きいと思われる。

*

グイニツェッリの場合とは対照的に、ダンテは「旧世代」のグイットーネに機会あるごとに否定的な評価を下しているが、それはダンテのグイットーネとの関係がやはり文書に基づいていたからであろう。『キタ・ノワ』第25章では、恋愛以外の主題に俗語を用いる詩人、自ら真意を明かせないような愚かで不合理な仕方で修辞を駆使する詩人、俗語詩の歴史が浅いために「草分け的存在」として（実力以上に）不当に名声を博している詩人のことが実名を一切挙げない形で否定的に述べられている³⁵⁾が、そこにグイットーネ（とりわけ「聖マリア騎士団」修道会のメンバーとなった以降のグイットーネ）への言及を読みとることは困難ではあるまい。修道士となったグイットーネは恋愛以外を主題とした詩を書いていたし、彼の作品には反恋愛詩の立場を鮮明にした宣言とも読める、カンツォーネ *Ora parrà s'eo saverò cantare*³⁶⁾ が含まれているからである。グイットーネはまた、「私の詩が難解なのは、自分でもよく知っている。だが、私が歌を詠むのは、私を愛してくれる人のためだ。私の詩才は、技巧のすべてに挑むように誘うから、私もまたそのようにしようと望むのである」³⁷⁾と自ら述べて憚らない、技巧過多に陥りがちな詩人でもあった。『俗語詩論』はそんなグイットーネに今度は実名を明確にしながらか、「法廷的な（＝洗練された）俗語に決して向かうことのないグイットーネ・ダレッツォ」（第1巻13章1）³⁸⁾、「それゆえ、無知の信奉者たちはグイットーネ・ダレッツォやその他の者らを讃えるのをやめるがよい。グイットーネらは語彙においても構文においてもいつも低俗で

あるから」(第2巻6章8)³⁹⁾、と手厳しい批判を加えてゆく。そして、グイットーネの名声を支えている無知な輩に対する批判は、グイットーネ本人に対する否定的見解とともに、「煉獄篇」第26歌121以下でも繰り返される。

A voce più ch'al ver drizzan li volti,
e così ferman sua opinione
prima ch'arte o ragion per lor s'ascolti.

Così fer molti antichi di Guittone,
di grido in grido pur lui dando pregio,
fin che l'ha vinto il ver con più persone.

彼ら(= stolti 「愚かな者たち」)は現実よりは世評の方へと眼差しを向け、学芸や道理に耳を傾ける前に自分の意見を固めてしまう。昔の多くの者もグイットーネに対して同じように振舞い、彼にばかり口から口へと繰り返し賛辞を捧げたが、やがて真実がより多くの者に受け容れられてうち勝つこととなった。

奇妙なのは、グイットーネに対するこの最後の評価がグイニッツェッリの口を通して表明されていることであろう。なぜなら、グイニッツェッリの作品群には、「修道士」グイットーネに書き送られた次のようなソネットが含まれているからである。

[O] caro padre meo, de vostra laude
non bisogna ch'alcun omo se 'mbarchi
ché 'n vostra mente intrar vizio non aude,
che for de sé vostro saver non l'archi.
A ciascun rëo s'ì la porta clauda,
che, sembr', ha più via che Venezi' ha Marchi;
entr' a' Gaudenti ben vostr' alma gaude
ch'al me' parer li gaudii han sovr'alarchi.

Prendete la canzon, la qual io porgo
al saver vostro, che l'aggiunchi e cimi,
ch'a voi ciò solo com' a mastr' accorgo,
ch'ell' è congiunta certo a debel' vimi:

però mirate di lei ciascun borgo
per la vostra correzion lo vizio limi.⁴⁰⁾

親愛なるわが父よ、あなたを讃えようなどと誰も試みる必要などありません。あなたの心の中に欠点が入り込もうとすれば、あなたの知恵が矢を放っていつも外へと放逐されるからです。その知恵がすべての欠点に対して門戸を閉ざします。思うに、ヴェネツィアにマルコ（という名の者？貨幣？）がある以上に、欠点は数多く存在するというのに。聖マリア騎士団の修道士ら——私の見るところ、彼らはあり余るほどの愉悅に浸っております——に囲まれて、あなたの心もさぞやご満足でありましょう。

このカンツォーネをおとり下さい。知恵に満ちたあなたに差しだすこの詩を、つめたり切り揃えたりして下さい。私はその作業を、師に委ねるように、ただあなたにのみ委ねます。カンツォーネは確かに緊密に編まれてはおりませんので、あなたの修正によって、そのあらゆる部分から欠点がとり除かれるようにしてください。

グイットーネの「添削」に委ねられたカンツォーネとは、どの作品なのであろうか (*Lo fin pregi' avanzato?*, *Al cor gentil?*)⁴¹⁾。ここでも、具体的な細部の把握は困難であるが、「煉獄篇」第26歌でグイットーネに厳しい否定的評価を下しているグイニツェツリが、グイットーネに「丁重」に作品の手直しを求めるとは大きな矛盾と言えるだろう（もし、この「丁重さ」が額面どおりに受けとっていいものであり、裏に皮肉な嘲笑的意図が隠されていないならば⁴²⁾）。グイニツェツリを「新優美体」の先駆者としての性格づけてゆく際に、果たしてダンテはグイットーネに書き送られたグイニツェツリのこのソネットを知っていたのであろうか。すでに見たように、「煉獄篇」第26歌でダンテはグイニツェツリを「わが父」(97-98: *il padre / mio*) と呼んでいたが、それは今上に引用したソネット（グイニツェツリ）の書き出し “[O] caro padre meo” を借用したもののようと思われる。また、「煉獄篇」同歌のグイニツェツリの台詞に充てられた部分（73、75行目）にお

いて、“marche”と“imbarche”が押韻している⁴³⁾のは、第2および第6行において“mbarchi”と“Marchi”が押韻している [O] *caro padre meo* への暗示かもしれない⁴⁴⁾。このような形式的な手がかりが小さいながらも十分説得的であるならダンテはグイニツェッリがグイットーネに書き送った、「添削」要請のソネットを知っていたことになるが、そうであるなら、「煉獄篇」第26歌のグイットーネ批判において、ダンテはグイニツェッリに「前言撤回」(palinodia)、しかも死後に行なわれる「前言撤回」をさせていることになる。このことは、ダンテがグイニツェッリの過去を意識的に書き換えてまで、彼をグイットーネの陣営よりは自分の陣営近くに位置づけたいと願ったこと、ダンテにとってグイニツェッリがそれほどまでに大切な先達だったことを意味している。ダンテの文学史観がこのように彼の主観性を色濃く反映しているならば、ダンテがグイニツェッリに与えた文学史上の位置を、グイニツェッリの残された作品群に照らして再検討することが、文学史家に課される避けられない作業のひとつになるであろう。グイニツェッリの作品に触れなおして、その詩的言語の特徴を把握し直すことが必要になる。

*

ダンテがグイニツェッリをグイットーネよりは自分の側に意識的に引き寄せようとしているならば、グイニツェッリの詩的言語の再検討はそこに見出されるグイットーネの特徴から始め、その規模を測定してゆくのがたどるべき道筋かもしれない。実際、グイットーネの「添削」に委ねられたかもしれないカンツォーネ *Lo fin pregi' avanzato* は、同一韻・曖昧韻（形式的には同じでありながら、コンテクスト的には異なった意味を帯びた単語に韻を踏ませるもの）の多用および（それに派生する）晦渋さにより、グイットーネの作品と容易に分類しうる。このカンツォーネを出発点としてグイニツェッリの作品を読み直してゆくのも、作業のありうべき進め方ではある。しかしながら、前掲拙論においてジャコモ・ダ・レンティーニの作品を詳しく論じた後なので、ここではシチリア派（とりわけジャコモ）との関連にお

いてグイニツツェッリの詩的言語の特徴を捉え直しておきたい。グイニツツェッリにおけるシチリア派的要素、グイットーネ的要素、新優美体的要素などを考慮して、ダンテがグイニツツェッリに対して施した文学史上の位置づけは総合的に補完・修正されねばならず、それにはいずれとり組まねばならないが、ここで行なうのはそのような総合の見直しのための予備作業のひとつである。

シチリア派（とりわけジャコモ）との関連において、グイニツツェッリの作品を読み返す時、まず最初に指摘しておきたいのはグイニツツェッリにおけるソネットの前半8行の押韻パターンが、新優美体的というよりは著しくシチリア的だという事実である。ソネットの後半6行に比して、前半8行は定型的な性格が強く、1) ABAB/ABAB と 2) ABBA/ABBA が2つの代表的押韻パターンとして確立していること、「新優美体」を境にして2) が主流をなすことは文学史の通説である⁴⁵⁾。真作とされるジャコモのソネットは22、グイニツツェッリの場合は14であるが、いずれの詩人もすべてのソネットがパターン1) で押韻している⁴⁶⁾。グイニツツェッリを他の詩人たちとの比較において客観的に定位できるよう、以下のデータを掲げておく。

ジャコモ	総数 22、1) 22、2) 0
ボナジュンタ ⁴⁷⁾	総数 20、1) 18、2) 2
グイニツツェッリ	総数 14、1) 14、2) 0
グイットーネ ⁴⁸⁾	総数 246、1) 215、2) 2、3) 29 (その他 ⁴⁹⁾)
カヴァルカンティ ⁵⁰⁾	総数 36、1) 10、2) 25、3) 1 (ABBB/ └ BAAA)
ダンテ ⁵¹⁾	総数 59、1) 10、2) 46、3) 3 (その他 ⁵²⁾)
チーノ ⁵³⁾	総数 134、1) 24、2) 102、3) 8 (その他 ⁵⁴⁾)
ペトラルカ ⁵⁵⁾	総数 317、1) 10、2) 303、3) 4 (その他 ⁵⁶⁾)

グイニツェッリの残存作品が少ないため、判断は（散逸したかもしれない作品を考慮しつつ）慎重に行なわなければならないが、ソネット前半8行の形式に関しては、この詩人がカヴァルカンティ以降の「新優美体」の詩人たちよりは「旧世代」の詩人たちに近いことは否定しがたい現実であろう。グイットーネは前述2パターン以外のソネットを29——その大半が、7音節詩行を挿入したり、前半部に11音節詩行を2つ追加したりした通常の14行よりも長めの作品で、例外はわずかに2つである——も詠んでいるが、それらソネットはいずれも「修道士」グイットーネ、すなわち「転向」以降のグイットーネの作と分類されている。グイニツェッリは一方でこの「修道士」グイットーネにカンツォーネの「添削」を求めながら、他方ソネットに関してはグイットーネ以上に保守的で、むしろジャコモに忠実だったのである。

グイニツェッリの14のソネットのうち、とりわけ *Lo vostro bel saluto* や *Io voglio del ver* は、「讚美」や「会釈」、「救いをもたらす女性」(= *beatrice*) などのテーマにより「新優美体」段階のダンテに大きな影響を与えた作品であり⁵⁷⁾、もともと「新優美体」的作品と規定することができるかもしれない。だが、注意すべきはそれらのテーマがこれら2つのソネットにおいていかに扱われているか、その文体上の特徴を捉えることであろう。*Lo vostro bel saluto* の後半6行において、グイニツェッリは恋人から与えられる「会釈」を次のように描いている。

Per li occhi passa come fa lo trono,
che fer' per la finestra de la torre
e ciò che dentro trova spezza e fende:
remagno como statua d'otono,
ove vita né spiro non ricorre,
se non che la figura d'omo rende.⁵⁸⁾

それ(=あなたの会釈と眼差し)は雷のように、眼を通して入ってきます。塔の窓を撃って入ってゆき、中に見出されるものを破壊する、まさに雷のように。私は真鍮製の像、人の姿はしているものの、命も

魂も通っていない像のようになってしまいます。

最初3行が彼女の「会釈」（および眼差し）の描写、残り3行が「会釈」を受ける「私」の描写に振り分けられたシンメトリカルな構造を有したこの6行は、2つの部分がいずれも“come” (= como) で導入される直喩を含んでおり、比較の対象として導入されたもの（「雷」、「真鍮製の像」）には、いずれの場合も、11音節詩行が2つ添えられ、微細な説明が加えられている。この説明のため、「雷」や「真鍮製の像」の方が精彩を放ち、むしろ「会釈」や「私」はかすんでしまいがちであるが、同じ傾向は恋人に対する讚美から始まる *Io voglio del ver* の前半部にも顕著である。

Io voglio del ver la mia donna laudare
 ed asembrarli la rosa e lo giglio:
 più che stella diana splende e pare,
 e ciò ch'è lassù bello a lei somiglio.
 Verde river' a lei rasembro e l'âre,
 tutti color di fior', giano e vermiglio,
 oro ed azzurro e ricche gioi per dare:
 medesimo Amor per lei rafina meglio.
 Passa per via adorna, e sì gentile
 ch'abbassa orgoglio a cui dona salute,
 e fa 'l de nostra fé se non la crede;
 e no.lle pò apressare om che sia vile;
 ancor ve dirò c'ha maggior vertute:
 null'om pò mal pensar fin che la vede.⁵⁹⁾

嘘・誇張を交えることなく、わが貴婦人を讚え、彼女を薔薇や百合になぞらえよう。彼女はあけの明星にもまさって輝かしいお姿を示される。彼女を天上の麗しいものに喩えよう。緑の岸辺や大空、黄色や紅などあらゆるの花の彩りに喩えよう。金や瑠璃玉、贈りものにふさわしい豪華な宝石に喩えよう。愛の神自身も彼女を通じて、よりよく洗練される。

麗しく気品あるご様子で道を歩んでゆかれては、彼女は人に会釈を

お与えになり、その者の〔心の〕高慢をうち倒しになる。もしも会釈を受ける者がわれらの信仰を持たぬ者であるなら、彼女はその者をわれらの信仰の一員に変えておしまいになる。心卑しき者は、彼女のお側に寄ることもできない。さらに誓って言うが、彼女にはもっと大きな不思議な力が宿っている。すなわち、彼女のお姿を見ている間は、誰も邪悪な考えを抱くことができなくなってしまうのである。

このソネットでは、「会釈」を扱った後半部は直喩を控えた書き方になっているが、それは異なった修辞が構成原理とされたからであろう。すなわち、ここでの修辞は「漸層法」（クライマックス）であり、主眼は恋人の「会釈」を出発点にして彼女が宿している「より大きな不思議な力」へと読者の注意を導いてゆくことであるから、「会釈」に直喩による説明を加えて読者の目をわきに逸らすことは「漸層法」の効果を弱めるものとして、むしろ避けられたのであろう。これとは対照的に、直喩を多用して、讚美の対象たる貴婦人を説明しようとしているのが前半部であるが、説明として導入された多くのもの（花々や星、緑の自然、宝石など）は結びつきあって彼女の統一的なイメージを形成するというよりは、個々の華やかさによって読者の目を楽しませる。

前掲拙論ですでに詳しく見たように、ジャコモ・ダ・レンティーニは説明のための比喩、とりわけ直喩を多用した詩人だったが、*Io voglio del ver*（グイニツェッリ）の前半部で説明のために導入されている多くのものが、ジャコモの *Diamante, né smiraldo*（テキスト・試訳については、前掲拙論註58参照）の中においてすでに用いられていることは見逃してなるまい。ジャコモのこのソネットの第10行目で婦人と比較されている、明るい「星」（*stella*）はまだ明確な形で「明けの明星」（*stella diana*）にはなりきっていない星であるが、グイニツェッリはピエル・デッラ・ヴィツニャに見られる「暁の高き星」（*la sublimata stella de l'albore*）⁶⁰のようなシンタグマと組み合わせながらジャコモのソネットを読み解くことができたであろう（ピエルの作品は、

本稿末「参考資料」に掲げる)。グイニツェッリは「明けの明星」というシンタグマに愛着をもっていたらしく別のソネット (*Vedut'ho la lucente*) の書き出しでも同じ表現を用いているが、そこでは「朝が黎明 (albore) をもたらす前に現われる、輝かしい明けの明星 (stella diana) を私は見た」⁶¹⁾と書いているからである。*Io voglio del ver* では、恋人は「明けの明星」に照り勝る存在とされているが、直喩の基礎には類似した二者を並列してみる行為がある。この並列の行為を表わす動詞が、*Io voglio del ver* では、2行目の“asembrare”、5行目の“rasembrare” および4行目の“somigliare”であるが、これらの動詞の選択にはジャコモの語法をやはり聞きとることができる。ジャコモ *Or come pote* の7行目に用いられていた“asomigliare” (なぞらえる) を想起しよう (前掲拙論第1章参照)。そこでは、「だが、私は婦人を光に喩え、自分の目は灯りを包む火屋ほやに喩えよう」と詠まれていたはずである。また、『ラウレンツィアーノ詞華集』がジャコモの作として伝えているソネット *Guardando basalisco*⁶²⁾ (前掲拙論註32参照) の7行目にも、“asemblare” (なぞらえる) が用いられていることを忘れてはなるまい。それは愛の性質を、蜥蜴、蛇、龍と比較しながら説明するソネットだが、「私は愛をこれらの動物になぞらえよう」と詠まれている。

以上のように、ダンテに大きな影響を与えたグイニツェッリのソネットの中にも、筆者の見るところでは、ジャコモ (ひいてはシチリア派) のはつきりとした刻印が残っているのであるが、気にかかるのはグイットーネが直喩に基づく讚美の詩に不満の意をもらしながら、次のようなソネットを詠んでいることである。

S'eo tale fosse ch'io potesse stare,
 senza riprender me, riprenditore,
 credo fareb[b]i alcun o[m] amendare
 certo, al mïo pare[r], d'u[n] laido er[r]ore:
 che, quando vuol la sua donna laudare,
 le dice ched è bella come fiore,

e ch'è di gem[m]a over di stella pare,
e che 'n viso di grana ave colore.

Or tal è pregio per donna avanzare
ched a ragione mag[g]lio è d'ogni cosa
che l'omo pote vedere o toc[c]are?

Ché Natura [né] far pote né osa
fat[t]ura alcuna né mag[g]ior né pare,
for che d'alquanto l'om mag[g]ior si cosa.⁶³⁾

もしも自己批判を強いられることなく他人を批判することができるなら、きっと誰かには過ちを改めさせることだろう。思うに、ひどい過ちなのだ。彼は自分の恋人を讃えたいと思う時、彼女に花のように美しいとか、宝石や星に匹敵するとか、顔の色彩は紅色だとか語る。

さて、そのようなことは婦人を讃えるための美点となるのだろうか。冷静に考えるなら、彼女は人が見たり触れたりできるすべてのものを凌駕する存在ではないか。男が〔女より〕自分の方がほんの少しすぐれていると考えることを別にすれば、自然は彼女を上回ったり彼女に匹敵したりするものを一切生みだすことができないのだから。

このソネットの6、7行目に言及され批判の対象となっている直喩は、ジャコモの前述ソネット *Diamante, né smiraldo* にもグイニツツェッリの *Io voglio del ver* にも当てはまるが、*S'eo tale fosse* の8行目（とくに、“viso”, “grana”, “colore”などの単語に注意）が言及しているのは、グイニツツェッリ *Vedut'ho la lucente* の5行目「紅に染まった雪の顔」(viso de neve colorato in grana) だと思われ、グイットーネが匿名のまま批判しているのはとくにグイニツツェッリだったと読み解くべきなのかもしれない。ともあれ、*S'eo tale fosse* が「転向」以前のグイットーネの作品であることを考慮すると、彼がジャコモ＝グイニツツェッリ路線に沿った讃美の詩法に（共犯意識を抱きつつ）満足していなかったことは少なくとも明らかであろう。そうであるなら、ソネット前半部の形式に関するのと同様、この場合も、ジャコモからの離脱を考えているのはむしろグイットーネであり、ジャコモに忠実なのはグイニツツェッリということになる。

*

すでに見たように、ダンテに大きな影響を与えた、グイニッツェッリのカンツォーネは *Al cor gentil rempaira* である。愛と高貴な心の同一性を論じた作品で、『キタ・ノワ』、『饗宴』に引き継がれるテーマであるが、慧眼なコンテニーニは多くの先行者がこのテーマを扱ってきたことを指摘し、*Al cor gentil rempaira* の「新しさ」はイデオロギー的側面に求めるべきではないとしている⁶⁴⁾が、この作品に関しても、中心的テーマがどのような詩的言語によって扱われているのか、その詩的言語にはシチリア派的刻印が残されていないか、検討してみなければならない。

Al cor gentil rempaira sempre amore
 come l'ausello in selva a la verdura;
 né fe' amor anti che gentil core,
 né gentil core anti ch'amor, natura:
 ch'adesso con' fu 'l sole, 5
 sì tosto lo splendore fu lucente,
 né fu davanti 'l sole;
 e prende amore in gentilezza loco
 così propiamente
 come calore in clarità di foco. 10

Foco d'amore in gentil cor s'aprende
 come vertute in pietra preziosa,
 che da la stella valor no i discende
 anti che 'l sol la faccia gentil cosa;
 poi che n'è tratto fòre 15
 per sua forza lo sol ciò che li è vile,
 stella li dà valore:
 così lo cor ch'è fatto da natura
 asletto, pur, gentile,
 donna a guisa di stella lo 'nnamora. 20

Amor per tal ragion sta 'n cor gentile
 per qual lo foco in cima del doplero:
 splendeli al su' diletto, clar, sottile;
 no li stari' altra guisa, tant'è fero.
 Così prava natura 25

recontra amor come fa l'aigua il foco
caldo, per la freddura.
Amore in gentil cor prende rivera
per suo consimel loco
com' adamàs del ferro in la minera. 30

Fere lo sol lo fango tutto 'l giorno:
vile reman, né 'l sol perde calore;
dis' omo alter: «Gentil per sclatta torno»;
lui semblo al fango, al sol gentil valore:
ché non dé dar om fé 35
che gentilezza sia fòr di coraggio,
in degnità d'ere',
se da vertute non ha gentil core,
com' aigua porta raggio
e 'l ciel riten le stelle e lo splendore. 40

Splende 'n la 'ntelligenza del cielo
Deo criator più che ['n] nostr'occhi 'l sole:
ella intende suo fattor oltra 'l cielo,
e 'l ciel volgiando, a Lui obedir tole;
e consegue, al primero, 45
del giusto Deo beato compimento,
così dar dovria, al vero,
la bella donna, poi che ['n] gli occhi splende
del suo gentil, talento
che mai di lei obedir non si disprende. 50

Donna, Deo mi dirà: «Che presomisti?»,
siando l'alma mia a lui davanti.
«Lo ciel passasti e 'nfin a Me venisti
e desti in vano amor Me per semblanti:
ch'a Me conven le laude 55
e a la Reina del reame degno,
per cui cessa onne fraude».
Dir Li porò: «Tenne d'angel sembianza
che fosse del Tuo regno;
non me fu fallo, s'in lei posi amanza».⁶⁵⁾ 60

高貴な心に常に愛は宿る、緑の森に鳥が宿るように。自然は高貴な心より前に愛を創ったのでもなければ、愛よりも前に高貴な心を創ったのでもない。太陽が創られるやいなや輝きは発せられたが、太陽より先に輝きがあったわけではない。熱が本来的に火の輝きの中に宿る

ように、愛は高貴な心に宿る。

宝石に不思議な力が宿るように、愛の炎は高貴な心に灯される。太陽が石を洗練する前は、星から効能が降り注ぐことはないが、太陽の力によって劣悪なものがとり除かれた後で、星は石に効能を授ける。ちょうどそのように、自然によって高貴に穢れなく創られたえり抜き心を、婦人が星のように愛に導くのである。

火が松明の先端に宿るのと同じ仕方で、愛も高貴な心に宿る。火はそこで思うがままに明るく軽妙に輝くが、誇りが高いので、別の仕方で松明に宿らない。熱い火が水と対立するように、卑しい本性は冷たさによって愛と対立する。磁石が鉄の鉋脈に宿るように、愛は自らと同じ性質をもつ場所として高貴な心に宿る。

太陽が泥を一日中照しても、泥は卑しいままだし、太陽が〔そのことによって〕熱を失うこともない。高慢な者は「血統により私は高貴だ」と言うが、私はそのような者を泥、高貴さを太陽に喩えよう。それというのも、高貴さが心の外にあると信じるべきではないから。水が光を宿し、天が星や輝きを宿しているように、徳によって高貴な心を宿していないなら、〔誰かの〕末裔であるという特権に高貴さがあると信じるべきではない。

太陽の光がわれわれの目を打つより、もっと強く、創造主である神は天体の運行を司る知性的存在〔=天使たち〕を照らされる。天使は天の彼方におわします創造主の意向を知り、天体を回転させながら神に服従し始める。そして、即座に完遂して、正しき神から祝福される。ちょうどそのように、実際、美しい婦人は、自分を愛する高貴な恋人の目を輝きで打って、彼女に服従することを決してやめない願いを生じさせるに違いない。⁶⁶⁾

貴婦人よ、私の魂が神の御前に達する時、神はおっしゃることでしょう。「なんと向こう見ずな！ おまえは天を越えて私のもとまで赴いたのか。しかも、虚しい愛との比較に私を用いたのだ。讚美のことばは私とりっぱな（天の）王国の女王〔=マリア〕——彼女によって、すべての悪はしりぞけられる——にのみふさわしいのだ。」私はこう返答

することができるでしょう、「彼女はあなたの王国に属する天使の容貌をしていました。彼女に愛を傾けても、私の落ち度ではありません。」

愛と高貴な心との関係を、1) 森と鳥、2) 太陽とその光、3) 火の輝きと熱の関係と3重に重ね合わせることによって説明する第1聯が終了すると、第1聯末の単語 (foco) を受けとって第2聯が始まるが、ここでは、ア) 太陽・星・宝石・石の効能、イ) 自然・貴婦人・高貴な心・愛、という2系列を平行関係に置きながら、さらに愛と高貴な心との関係に説明が加えられてゆく。このように、いずれも説明のための直喩を基本的な構成原理とした6つの聯が、概ね「コブラス・カプフィニーダス」(coblas capfinidas) の技法——先行聯の最終行に含まれた単語と、同一ないしは(同語源の)類似した単語で後続聯を開始する——により結び合わされているのが、グイニッツェッリのカンツォーネ *Al cor gentil rempaira* だと言えよう(第3・第4聯間では、「コブラス・カプフィニーダス」ではなく、語源的なつながりとは無関係な“ferro”-“fere”という類似音の反復が代用されているが、他方、第5・第6聯間では、後続聯の書き出し、“donna”が先行聯の最終行ではなく、終わりから3行目の“bella donna”と照応している)。聯と聯は「コブラス・カプフィニーダス」等により形式的には連結されているが議論を有機的に発展させるのではなく、むしろ並列する数珠玉のような感じを与える。実際、「太陽」に対するグイニッツェッリの意味づけは首尾一貫しておらず、それは第1聯では「高貴な心」(第5行)、第2聯では「自然」(第14、16行)、第4聯では「高貴さそのもの」(第34行)を表わすものとして扱われている⁶⁷⁾。それゆえ、聯内および聯間において入れ替わり立ち替わり導入される直喩が与える印象は、カンツォーネにおける直喩の方がやや息の長い展開をしているという違いはあるにせよ、すでに見たソネット *Io voglio del ver* の前半部が与えるそれと酷似している。

ピコーネは、*Al cor gentil rempaira* の第5、第6聯が示す場面、すなわち神や聖母、天使らによって構成される天上の場面が、グイットーネの *S'eo tale*

fosse に含まれた批判への返答になっているのだと解釈している⁶⁸⁾。つまり、貴婦人はもはや自分に劣る自然の諸物（花、宝石、星）になぞらえられるのではなく、宇宙の階梯の限りなく上に位置した存在（神、天使）に喩えられる。だが、貴婦人がなぞらえられるものが高次の存在になったからといって、そのことをもってグイニツェッリがジャコモとは異なった新たな詩法に開眼したとは決して主張できない。第6聯の“dare ... per sembranti”（54行目、「～を類似物として提示する、比較の対象として出す」）は、第4聯の“semblare”（34行目、「なぞらえる、喩える」）に変奏を加えたものだが、これらの動詞表現は *Al cor gentil rempaira* をすでに見た *Lo vostro bel saluto* や *Io voglio del ver* へと密接に結びつけ、これら3作品をジャコモの強い影響下に位置づけることを推奨しているように思われる。また、忘れてならないのは、貴婦人を天使と比喩することは、グイットーネの批判に刺激されたグイニツェッリが思案の結果たどりついた発見というよりは、むしろジャコモがすでに用いていた比喩の再利用だという事実である。マクロテクスト的連関によって結ばれていると指摘した、ジャコモのカンツォーネ *La 'namoranza — disiosa* とソネット *Angelica figura — e comprobata* を想起されたい（前掲拙論註102参照）。前者の「あなたのお姿をよく心に思い浮かべる時にはあなたは奇蹟であり、生身の人間とは思われません」（25-27行目）は、後者の書き出し「天使のようなお姿」および「あなたは私には生身の女とは思われません」（5行目）と関連づけて読まれるなら、「天使のような奇蹟の婦人」のイメージを結ぶであろう。加えてさらに、直喩を基本的構成原理とした聯の数珠つながりという *Al cor gentil rempaira* 全体の印象は、ジャコモのカンツォーネ *Madonna, dir vo voglio* のそれとよく符合する。

Madonna, dir vo voglio
 como l'amor m'à priso,
 inver' lo grande orgoglio
 che voi bella mostrate, e no m'aita.

Oi lasso, lo meo core,
 che 'n tante pene è miso 5
 che vive quando more
 per bene amare, e teneselo a vita.
 Dunque mor'e viv'eo?
 No, ma lo core meo 10
 more più spesso e forte
 che no faria di morte — naturale,
 per voi, donna, cui ama,
 più che se stesso brama,
 e voi pur lo sdegnate: 15
 amor, vostra 'mistate — vidi male.

Lo meo 'namoramento
 non pò parire in detto,
 ma sì com'eo lo sento
 cor no lo penseria né diria lingua; 20
 e zo ch'eo dico è niente
 inver' ch'eo son distretto
 tanto coralemente:
 foc' aio al cor non credo mai si stinguia;
 anzi si pur alluma: 25
 perché non mi consuma?
 La salamandra audivi
 che 'nfra lo foco vivi — stando sana;
 eo sì fo per long'uso,
 vivo 'n foc' amoroso 30
 e non saccio ch'eo dica:
 lo meo lavoro spica — e non ingrana.

Madonna, sì m'avene
 ch'eo non posso avvenire
 com'eo dicesse bene 35
 la propia cosa ch'eo sento d'amore;
 sì com'omo in prudito
 lo cor mi fa sentire,
 che già mai no 'nd'è quito
 mentre non pò toccar lo suo sentore. 40
 Lo non-poter mi turba,
 com'on che pinga e sturba,
 e pure li dispiace
 lo pingere che face, — e sé riprende,

che non fa per natura la propia pintura; e non è da blasmare omo che cade in mare — a che s'aprende.	45
Lo vostr'amor che m'ave in mare tempestoso, è sì como la nave c'a la fortuna getta ogni pesanti, e campan per lo getto di loco periglioso; similmente eo getto a voi, bella, li mei sospiri e pianti. Che s'eo no li gittasse parria che soffondasse, e bene soffondara, lo cor tanto gravara — in suo disio; che tanto frange a terra tempesta, che s'atterra, ed eo così rinfrango, quando sospiro e piango — posar crio.	50
Assai mi son mostrato a voi, donna spietata, com'eo so' innamorato, ma crëio ch'e' dispiacera voi pinto. Poi c'a me solo, lasso, cotal ventura è data, perché no mi 'nde lasso? Non posso, di tal guisa Amor m'à vinto. Vorria c'or avvenisse che lo meo core 'scisse come 'ncarnato tutto, e non facesse motto — a vo', isdegnosa; c'Amore a tal l'adusse ca, se vipera i fusse, natura perderia: a tal lo vederia, — fora pietosa. ⁶⁹⁾	55
	60
	65
	70
	75
	80

貴婦人よ、美しいあなたは大層冷たい態度をおとりなるから、愛が
いかに私をとらえているか語って聞かせましょう。また、愛がいかに
私の助けにはならないかを語って聞かせましょう。ああ哀れなるかな、

私の心こそは。私の心はひどい苦しみの中にあるから、深く愛して死ぬ時に活路を見出し、死をこそ命と見なしています。それでは、私は〔不死鳥のように〕死にかつ同時に蘇るのでしょうか。いえ、私がそうするわけではありません。しかし、私の心は普通の死を迎える時よりもはるかに苦しみながら、何度も息絶えます。それというのも、貴婦人よ、あなたのせいなのです。私の心は自分以上にあなたを愛し、あなたを求めています。それなのに、あなたはいつも私の心を蔑まれる。愛しい人よ、私があなたへの愛を抱いたのは不幸なことでした。

私の愛はことばでは表現できません。いかに私が愛を感じているかは、どのような心によっても想像しえず、どのような舌によっても語りえないでしょう。私が語って聞かせることは、私が心の底から苦しんでいる実状に比べれば、無にも等しいのです。私の胸には燃える火があり、決して消えることはないでしょう。消えるどころか、ずっと燃え続けています。その火はどうして私を焼き尽くしてしまわないのでしょうか。サラマンドラは火の中に暮らしながら焼けることがないと聞いたことがあります。私も長い習慣によってそのように振舞っています。愛の炎の中で暮らしているからです。でも、何と言ったらいいのかわかりません。私の麦は穂をつけながらも、実を結ばないからです。

貴婦人よ、こうして、私は自分が感じている愛の思いをうまく言い表わすことができなくなってしまうのです。私の心は、痒みにとらわれた者のような感じを抱かせます。痒みにとらわれた者はかゆいところに手が届かないうちは、決して落ち着くことがないからです。うまく表現できないことが私を怒らせます。あたかも描いては消し、消しては描きながらも、自分の絵がいつこうに気に入らず、自分の絵を実物にならって描けないと言って、自分自身を責める人のようなありさまです。しかし、海に落ちた者が何にすがりつこうとも、非難されるべきではないでしょう〔=溺れる者が何でもすがりついて助かろうとするように、ちょうどそのように私も不完全な愛の表現であろうとそれに頼らざるをえないでしょう?〕。

私を時化の海に導いた、あなたへの愛は、喩えれば、嵐に出会って

重いもののすべてを投げ捨てる船のようなものです。投げ捨てることによって、難所から救われます。ちょうどそれと同じように、麗しき人よ、私はあなたに向かって溜息や涙を投げます。もし投げなかったら、私は沈んでしまうように思われるのです。きっと私は沈んでしまうでしょう、私の胸はそれほどまでに重く願いを募らせることでしょう。嵐は陸に突き当たり、やがて鎮まります。私も同じように [あなたに向かい] 突進します。溜息の旋風を巻き起こし涙の雨を降らせる時、やがて私も安らぎを得ることができると思うからです。

私がどれほど愛しているか、つれない人よ、もうあなたには十分示しました。でも、思うに、絵に描いた私の姿さえ、あなたは嫌だと思われるでしょう。ああ、こんな定めを受けたのは [一方的に] 私だけだということに、どうして私はやめないのでしょうか。やめられないからです、愛の神がそれほどまでに私を征服したのです。つれないあなたには黙したまま語らなくとも、私の心臓がすっかりそのまま (? 私の心がすっかり有形となって?) [胸から] 飛びだしてくれればいいのに。愛は私の心臓・心を哀れな状態に陥れたから、その場に蛇が居合わせ [て私の心臓・心を見] たなら、[冷酷な] 本性を失ってしまうことでしょう。哀れな状態の私の心臓・心を見て、蛇も憐憫の情をもよおすことでしょう。

ジャコモのこのカンツォーネでは、読者である貴婦人に向かって主題を明らかにする第1聯 (「愛がいかにか私をとらえているか語って聞かせましょう」) と、その主題が十分展開され終わりに達したことを告げる最終 (第5) 聯 (「私がどれほど愛しているか、つれない人よ、もうあなたには十分示しました」) においては、直喩が聯の構成原理としてあまり顕在化していない。そのことは、この2聯が作品の開始・終了を告げる特別な役割を帯びていることと無関係ではなかるうが、それでも、第1聯は生と死の反復に言及することによって、「私」を「不死鳥」になぞらえる直喩を暗黙の前提としているように思われる (因みに、「動物誌」という材源の活用は第2聯の「サラマンドラ」

への言及にいたって明確化する)。同様に、最終聯でも、「貴婦人」と「(冷酷な) 蛇」とを天秤にかける比較が暗黙の前提とされている。第2聯では、後半部の「サラマンドラ」への言及とともに直喩が顕在化し始めるが、その直後に置かれた「報われない私の愛」と「穂は出しても実を結ばない麦」の平行関係は省略を補うことによつてのみ直喩としての十分な形式に達する。これに対して、第3、第4聯では、明確な形式を具えた直喩が多用され、明らかに、聯の広がり的大半を占めるようになる。しかも、これら2聯は、いささか形式は乱れているが、「コブラス・カプフィニーダス」によつて結ばれている(第3聯末の「海」[mare]に対する、第4聯2行目の「嵐の海」[mare tempestoso]の照応に注意)。第3聯では、「私」は「痒みに手の届かない者」、「自分の作品に満足できない画家」、「海に落ちて、藁にもすがりつこうとしている者」と3重になぞらえられている(ただし、最後の「海に落ちた者」との比較は直喩としての十分な形式に達しておらず、第2聯の「実を結ばない麦」の場合と同様、聯末に配されている)。他方、第4聯は「(貴婦人へ愛を捧げる)私」と「嵐に遭遇して難破の危機にさらされる船」の比較、「(私が宿している)愛の情念」と「嵐」の比較によつて構成されている。ジャコモの意図としては、「嵐」の意味を明確にするために2番目の比喩を導入したのであり、2つの比喩の間で「嵐」が意味するものを統一しようとしたのかもしれないが、両者の間では「嵐」の扱いが微妙に異なっているように感じられる。前者では、「嵐」は「私」に対立する外的障害のように描かれ、それゆえに涙を流し溜息をつく主体はあくまでも「私」であるのに対して、後者では、「嵐」は愛の情念そのものとして「私」の内側に移されて、涙や溜息の直接的原因として描かれているように思われる。グイニツェッリの「太陽」に見られた首尾一貫性の欠如に比べればかすかな齟齬にすぎないが、それは直喩を畳みかけるように使用してゆくことに発しているのではあるまいか。ともあれ、ジャコモのカンツォーネ *Madonna, dir vo voglio* の第3、第4聯でとくに明確化される構成のメカニズムをダイナミックにカンツォーネ全体に拡張したの

が、グイニツツェッリの *Al cor gentil reppaira* にほかなるまい。

むしろ注意すべきは、*Madonna, dir vo voglio* の直喩が、「動物誌」のような擬似科学的なものにも依存しつつ、どちらかと言えば、実生活の場面に由来するものが多い（もちろん、そのことは、ジャコモが日常生活の秀れた観察者として実体験から直喩を生みだしたことを意味するものではなく、ジャコモが先行作品・先行詩人からさまざまな直喩を学んだ可能性を少しも排除しない）のに対して、*Al cor gentil reppaira* の直喩が自然現象の観察（現代科学に照らすと、必ずしも正確な観察ばかりではない）に大きく依拠しつつ、より抽象的でアカデミックな印象を与える点ではあるまいか。この差異は、*Madonna, dir vo voglio* から学びとったものを *Al cor gentil reppaira* において活かしきれようになるまでグイニツツェッリがたどらねばならなかった模索の過程におそらくは由来するのであろう。古くはベルテッリ、最近ではジュンタ、プルニョーロ、ロッシ、アントネッリらの研究が指摘しているように⁷⁰⁾、*Madonna, dir vo voglio* をモデルとして書かれたグイニツツェッリの作品には、カンツォーネ *Donna, l'amor mi sforza* を加えることができる（因みに、このカンツォーネをコンティーニは「グイットーネ的というよりは、いまだにシチリア派的趣向の」作品と評するにとどめている⁷¹⁾）。

Donna, l'amor mi sforza
 ch'eo vi deggia contare
 com'eo so 'nnamorato,
 e ciascun giorno inforza
 la mia voglia d'amare:
 pur foss'eo meritato!
 Sacciate in veritate
 che sì pres'è 'l meo core
 di vo', incarnato amore,
 ca more di pietate,
 e consomar lo faite
 in gran foch'e 'n ardore.
 Nave ch'esce di porto

5

10

con vento dolze e piano, fra mar giunge in altura;	15
poi vèn lo tempo torto, tempesta e grande affano li aduce la ventura;	
allor si sforza molto como possa campare,	20
che non perisca in mare: così l'amor m'ha colto e di bon loco tolto e miso a tempestare.	
Madonna, audivi dire	25
che 'n aire nasce un foco per rincontrar di venti; se non more 'n venire in nuviloso loco,	
arde immantenenti	30
ciò che dimora loco: così ['n] le nostre voglie contr[ar '] aire s'accoglie, unde mi nasce un foco	
lo qual s'astingue un poco in lagrime ed in doglie.	35
Grave cos'è servire signor contra talento e sperar guiderdone, e mostrare 'n parere	40
che sia gioia 'l tormento contra su' oppinione. Donqua si dé gradire di me, che voglio ben fare e ghirlanda portare	45
di molto orgoglio ardire: che s'eo voglio ver dire, credo pingere ⁷²⁾ l'aire.	
A pinger l'air son dato, poi ch'a tal sono adutto:	50
lavoro e non acquisto. Lasso, ch'eo li fui dato! Amore a tal m'ha 'dutto,	

fra gli altri son più tristo.
 O signor Geso Cristo, 55
 fu' i' però sol nato
 di stare innamorato?
 Poi madonna l'ha visto,
 megli'è ch'eo mora in quisto:
 forse n'avrà peccato.⁷³⁾ 60

貴婦人よ、愛に強いられ私はあなたに語ります、私がどれほど愛しているかを。私の愛の願いは日に日に募ってゆきます。ああ報いられる日がくればいいのに。嘘・偽りのないこととしてお知りおきください。愛の化身とも言うべきあなたに私の胸はすっかりとらわれ、ために苦しみのせいで息絶えることでしょう。あなたゆえに、私の胸は大きな炎と灼熱の中で滅却します。

快い穏やかな風に吹かれて港を出た船が海を進んで沖に達すると、悪天候がめぐり来て、不運にも時化と大きな苦しみに見舞われます。そこで、海に沈まず難を逃れることができるようにと、船は大きな努力を傾けます。ちょうどそのように、愛も私をとらえたのでした。安全な場所から私を引き離し、嵐にさらしたのでした。

貴婦人よ、聞いたところによれば、空では風がぶつかり合うことによって火が生じるそうです。その火が[風が衝突するところよりは低い]雲の立ちこめた処に達する時に消えてしまわなければ、たちどころにそこにあるものを燃やしてしまいます。ちょうどそのように、私たち[ふたり]が[それぞれ]願いとすることは相対立する風を孕み、そこから私のうちに火が生まれます。涙と悲しみによって、火はわずかに勢いを弱めます。

主人に不承不承仕え、報償に期待をかけることはつらいことです。自分の考えを偽って、苦しいことを楽しいことであるかのように見せかけるのはつらいことです。それゆえ、善をなそうとしている私、大きな誇りを生むことに果敢に挑むという榮譽を得たいと望む私は大切に思われていいはずで。それというもの、実を言えば、私は空気に色を塗ろうとしているからです（?暖簾の腕押しをしようとしているからです?）。

空気に色を塗るよう（?暖簾を腕押しするよう?）、私は強いられているのです。働けども益の上がらない、そんな状態に陥ってしまったからです。ああ、私は愛に身を捧げたが、愛は私を悲惨な状態へと導き、私以上に不幸な者は誰もおりません。ああ主なるイエス・キリストよ、私は「報いられることなく」ただ愛するためだけに生まれてきたのでしょうか。わが恋人もそのことを見抜いているようなので、私はここで息絶えるのがよいのでしょうか。[そうすれば、]彼女もおそらくは憐れんでくれるでしょう。

作品の主題を読者たる貴婦人に向かって明示する冒頭の表現（「愛に強いられ私はあなたに語ります、私がどれほど愛しているかを」）は、ジャコモの書き出し（「愛がいかにも私をとらえているか語って聞かせましょう」）に大きな変奏を加えたものだが、それでも対応関係は十分に明らかであろう。すでに見たように、ジャコモにあつては第1聯と最終聯が呼応し合つて主題を強調していたが、注目すべきはジャコモの書き出しを変形してゆくに際して、グイニツェッリが思い切った配置転換を行ない、ジャコモの最終聯で用いられている表現を書き出しに移している点であろう。*Madonna, dir vo voglio* の67行目と *Donna, l'amor mi sforza* の3行目が実質的に同一の7音節詩行（com'eo so' (i)nnamorato）になっていることに留意されたい（他方、ジャコモ2行目の7音節詩行「愛がいかにも私をとらえているか」[*como l'amor m'à priso*] は、グイニツェッリ8行目の7音節詩行「私の胸がすっかりとらわれていること」[*che sì pres'è 'l meo core*] に変形されて利用されている）。転じて末尾部に目を遣ると、2つのカンツォーネはともに「憐憫」への言及をもって閉じられている。もつとも、一方（ジャコモ）が“fora pietosa”と書くのに対して、他方（グイニツェッリ）は“avrà peccato”と書き、表現の外形は大きく異なっている。そのため、書き出しの場合に比して、末尾部の照応はいささか地味ではあるが、それでも「憐憫」に対する否定的展望は共通している。ジャコモは、心臓が貴婦人の目にとまるように外に飛び出すと

いう実現しがたい条件を出すことによって、「憐憫」の不可能性・獲得しがたさを表現する。これに対して、グイニツェッリは自らの死によってかろうじて生じる「憐憫」に言及して、その不毛さ・無益さを表現する。また、ジャコモ（69-72行目）もグイニツェッリ（55-57行目）も、最終聯（末尾直前の部分）において不幸な愛を宿命と捉える見方を示している点も見落とすべきではあるまい。以上のように、*Donna, l'amor mi sforza* の冒頭と結末は *Madonna, dir vo voglio* が残していった刻印によって特徴づけられている。間にはさまれた残余の部分には、語彙・シンタグマの細かな対応（時には、配置と意味の大幅な転換をとまなう）が観察される⁷⁴⁾が、より大きな表現単位としての直喩に注意を傾けよう。

テキストに加えるべき句読点に関しても、また与えるべき解釈に関しても研究者の意見が一致していない、難解な第4聯については、管見として、ここで問題となっているのは2つの困難な試み——すなわち、1) 報償に期待をかけながら、いやいやながら主人に仕え、不満な素振りは少しも表には出さないこと、および2) 空気に絵を描くこと（あるいは、空気を押すこと）——を比較の秤にかけることだと述べるにとどめておきたい。前掲拙論註33に詳しくまとめたように、ジャコモはさまざまな人間の習性や行動を題材とした比喩を多用しているが、グイニツェッリはそれらに刺激を受け、新しい比喩を考案しようとしたのであろう。その際に、ジャコモ *Madonna, dir vo voglio* から「画家」のイメージ（41-46行目）を借用しただけではなく（両義性をもった“*pingere l'aire*”が「空気に絵を描くこと、色を塗ること」を意味するならば）、愛神を仕えるのが困難な不実な主人として描くジャコモのいくつかのソネット——*[C]erto me par* や *[C]hi non avesse*⁷⁵⁾——からも着想を得たのであろう。グイニツェッリが述べようとしているのは、問題の貴婦人に愛を捧げ善行に励むことは、不実な主人に従順を装いながら奉仕することよりもっと困難なことであり、実際「空気に絵を描くこと（あるいは空気を押すこと）」と同じく不可能だということであろう。第4聯と較べる

とはるかに明晰な第2、第3聯は、ともに直喩によって構成されている聯であるが、「私」と「難破の危機に遭遇する船」を比較する第2聯が *Madonna, dir vo voglio* 第4聯と類似していることは明白であろう。類似は言説内容・テーマのレベルにとどまらない。ブルニョーロの鋭い指摘が明らかにしたように⁷⁶⁾、グイニツェッリ 23 行目の「安全な場所から」(di bon loco) はジャコモ 44 行目の「難所から」(di loco periglioso) を裏返したものにほかならず、類似は言語表現のレベルにまで達している。しかも、グイニツェッリが「悪天候」(16 行目) を表わすのに「曲がった、歪んだ」(torto) という形容詞を用い、その形容詞により押韻 (porto - torto) し、さらに、この単語のごく近く (18 行目) に「(不・悪) 運」(ventura) を配しているのは、明らかに、ジャコモのソネット *[P]er sofferenza si vince* 10-11 行目「私の運が有利に展開しなくとも、きっと私はひどく絶望することはない」(ancor la mia ventura vada torta, / no me dispero certo malamente)⁷⁷⁾ (“torta” は “aporta” と押韻) にヒントを得た表現であろう。こうしたことば遣いの微細な類似が、テーマの類似と連動し合って、第2聯のモデルとしてジャコモを指し示す。第3聯では、「涙と悲しみのうちにいざさか鎮まる情熱の火」(グイニツェッリ、34-36 行目) を「溜息をつき泣くことによって安らぎを得る私」(ジャコモ、63-64 行目) の変形とする意見もある⁷⁸⁾ が、*Madonna, dir vo voglio* との言説内容の類似は退き、言語表現上の類似の方がむしろ目立つ。「出典・典拠」の存在をほのめかす「私は聞いた」(グイニツェッリ 25 行目、“audivi”) は、ジャコモ 27 行目にまったく同じ形で用いられている (因みに、ジャコモでは「私は聞いた」は「サラマンドラ」との関連で用いられているが、この伝説的な動物はグイニツェッリ *Lo fin pregi' avanzato* の 38 行目に配置転換の上、利用されている)。また、グイニツェッリ 35 行目「鎮まる」(s'astingue) はジャコモ 24 行目 (si stinguo) に由来しているように思われる。

グイニツェッリの2つのカンツォーネ、*Al cor gentil rempaira* と *Donna, l'amor mi sforza* を、*Madonna, dir vo voglio* (ジャコモ) に対する依存度とい

う観点から比較するなら、ことば遣いのレヴェルにまで達するモデルの影響をより強く受けている後者が先に制作され、続いてモデルから構成原理のエッセンスのみを抽出して利用している後者が制作されたということであろう。グイニツェッリがジャコモをモデルにしたという観点から *Donna, l'amor mi sforza* を読み返してみると、ジャコモの影響とも解釈しうる曖昧な要素がいくつか観察される。ブルニョーロがジャコモを変形したものとして指摘したグイニツェッリ第3聯の一節もそのような曖昧な要素のひとつであろう。第1聯の「大きな火と熱の中で死滅する心」(11-12行目)はジャコモの「不死鳥」や「サラマンドラ」への暈^ぼかした言及と読めなくはないかもしれない(2匹の伝説的動物が火と熱による「死」を乗り越えるのに対して、「心」がそうできないのはモデルに加えられた変奏であろう)。また、アントネッリが指摘しているとおり⁷⁹⁾、54行目「私こそ、ほかの者たちの中でもっとも不幸な者」(*fra gli altri son più tristo*)によってグイニツェッリが自らをトリスタン(語源的には、Tristan < tan trist 「たいへん悲しい、大いに不幸な」)になぞらえているならば、そこにもジャコモの影響を見るべきなのかもしれない。すでに前掲拙論で見たように、ジャコモもしばしば自分をトリスタンに喩えていたからである。このような視点に立つならば、情念の火の発生を雷の発生になぞらえて説明しているグイニツェッリ第3聯の直喩もジャコモの影響に帰すべきものと思われてくるかもしれない。実際ジャコモは気象現象を利用した比喩を用いてもいるし(前掲拙論註33のリスト、本稿末「参考資料」に掲げたソネット *A l'aire claro* を参照)、*Si come il sol* (前掲拙論第1章参照)のような自然学(光学)に依拠したソネットも詠んでいるからである。グイニツェッリはそうしたジャコモの「詩法」に刺激されながらも対抗しつつ上の雷の比喩に達したのかもしれない、その可能性はむやみに否定されるべきではなかろう。他方、雷の比喩が全体の調子・雰囲気において *Al cor gentil rempaira* で用いられている諸々の直喩と親和関係にあり、カンツォーネ *Madonna, il fino amor* 第5聯(カンツォーネの全体は、本稿末「参

考資料」に掲げる)とも結びついて1つの系列をなしていることを見逃すべきではない。

In quella parte sotto tramontana
sono li monti de la calamita, 50
che dan vertud' all'aire
di trar lo ferro; ma perch'è lontana,
vòle di simil petra aver aita
per farl' adoperare,
che si dirizzi l'ago ver' la stella. 55
Ma voi pur sète quella
che possedete i monti del valore,
unde si spande amore;
e già per lontananza non è vano,
ché senz' aita adopera lontano. ⁸⁰⁾ 60

北のあの地方には磁石の山があり、空気に鉄を惹きつける力を伝えます。しかし、その地方は遠いので、鉄を働かせ、針が北極星の方を向くようにするためには、空気は同じ石(=磁石)からの援助を必要とします。しかし、あなたは徳の山を所有する唯一の女性であり、その山から愛が広がります。あなたの徳[の力]は遠く隔たっていても無効とはなりません。援けがなくとも遠くまで作用を及ぼします。

すべての註釈者がグイニツェッリの磁石に関するこの聯を、グイド・デッレ・コロネの次の一節と関連づけている(カンツォーネ *Ancor che l'aigua* の第5聯に相当する一節であるが、カンツォーネの全体は本稿末「参考資料」に掲げる)。

La calamita contano i saccenti
che trare non poria
lo ferro per maestria,
se no che l'aire in mezzo le 'l consenti. 80
Ancor che calamita petra sia,
l'altre petre neenti
non son cusì potenti

a traier perché non hano bailia.
 Così, madonna mia, 85
 Amor s'è appercepto
 che non m'avria potuto
 traer' a sé se non fusse per voi;
 e sì son donne assai,
 ma no nulla per cui 90
 eo mi movesse mai,
 se non per voi, piagente,
 in cui è fermamente
 la forza e la vertuti.
 Adonque prego l'Amor che m'aiuti. ⁸¹⁾ 95

賢者らの語るところによると⁸²⁾、磁石はいかに力を発揮しても鉄を引きつけることはできないでしょう、もし間にある空気がそれを許さないならば。磁石は石にすぎないとしても、ほかのどのような石も同じように〔鉄を〕引きつけることはまったくできません。牽引力をもたないからです。貴婦人よ、ちょうど同じように、あなたがいなければ、私を引きつけることはできなかつただろうと、愛は気づいたのでした。確かに婦人は大勢いますが、私を〔引きつけて〕動かすような女性は、麗しき人よ、あなたを除けば誰もおりません。あなたの中には〔不思議な〕力や効能がしっかりと宿っています。だから、私は愛の神に助けてくださいと懇願するのです。

「磁石」と「鉄」、および両者の間に媒介として存在する「空気」の3項からなる自然現象に、ガイド・デツレ・コロネは「愛（神）」、「私（詩人）」、「貴婦人」の3項からなる心理現象を並置し（因みに、「媒介項」という視点は *Ancor che l'aigua* 第1聯の内容を引き継いだものにはかならない）、「磁石」＝「愛神」、「鉄」＝「私（詩人）」、「空気」＝「貴婦人」の対応関係を構築しようとして意図しているのであろうが、その説明にはいささか混乱したところがないわけではない。とくに、ガイドが「貴婦人」に宿る力や効能について言及しているところ（92-94行目）では、彼女が「磁石」に喩えられている印象を与え、その結果彼女と「愛神」の区別が曖昧になっている（彼女が「愛

神」と性質を同じにする別の「磁石」のような感じである)。これに対して、グイニツェッリにおいては、自然現象の部分では「媒介項」が「空気」と(北極と鉄の間に存在する別の)「磁石」に2重化する一方で、心理現象の部分では「媒介項」は現象に影響を及ぼさないものとして除外され、(北極の「磁石」を威力の点で凌駕する)「貴婦人」と(「鉄」に対応する)「私(詩人)」の2項が残るのみである。ガイド・デッレ・コロネネに見られる曖昧さを自然現象の部分で受け止めつつ、それを心理現象の部分で解消しようとしたのがグイニツェッリの聯なのではあるまいか。ともあれ、グイニツェッリが *Madonna, dir vo voglio* (ジャコモ) から学んだものを *Al cor gentil rempaira* に昇華してゆく過程において、ガイド・デッレ・コロネネから学んだものが重ね合わされたことは確実と見てよかろう。因みに、「磁石」には *Al cor gentil rempaira* 第3聯(30行目)も別の異なった視点から言及している。また、愛を知らない人間を冷たいもの(冷水、氷、雪像)に喩えている *Ancor che l'aigua* の箇所(12,20行目、愛は対照的に炎、熱いものに喩えられている)が、*Al cor gentil rempaira* 25-27行目(「熱い火が水と対立するように、卑しい本性は冷たさによって愛と対立する」)に集約的に再利用されている点も見逃すべきではあるまい。

ジャコモとグイニツェッリの間を介在したガイド・デッレ・コロネネという視点から、再び *Donna, l'amor mi sforza* を読み返してみるならば、ほかならぬこの書き出しには、カンツォーネ *Amor, che lungiamente* (本稿末「参考資料」に全文を掲げる)の刻印が捺されているように思われる。ソネットやカンツォーネに特別な表題を付ける習慣がなかった時代には、書き出しの1行が実質上の表題として重要な役割を果たしたはずだが、グイニツェッリの書き出し(とくに、「l'amor mi sforza」という5音節の部分)は、4行目の“inFORZA”と語源的な連想を働かせながら押韻し、さらに19行目にいたって“Allor si SFORZA”(大文字は類似を強調するために使用)という類似の音を多く含んだ5音節句と呼応するため、とりわけ読者の印象に残りやすい

仕組になっている。注目すべきは、*Amor, che lungiamente* 21行目に“s’Amor vi sforza”というほぼ同一の5音節句が用いられていること（ただし、行頭に配されているため、押韻はしていない）⁸³⁾、この句が用いられている第2聯には語源的な連想が働く（派生語による）韻が繰り返し用いられていること（*terra - aterra; serra - inserra*）、さらに40行目“sforzo”が“s’Amor vi sforza”に遠く衍していることであろう。これらのことを考慮すると、グイニツェツリグイニツェツリの書き出しは、*Amor, che lungiamente*の構成原理を抽出して、*Amor, che lungiamente*自体から着想を得た5音節句に応用したもののように思われる。また、*Donna, l’amor mi sforza*第2聯の「航海」の比喩の直接的モデルがジャコモ *Madonna, dir vo voglio*の第4聯であるという事実は変わらないにしても、*Amor, che lungiamente* 63-64行目が「波間に揺れる船」のイメージを含んでいることは、*Donna, l’amor mi sforza*を執筆する際に、連想を通じてグイド・デッレ・コロネネのカンツォーネがジャコモのそれと結びつく要因となったのではあるまいか。

以上見てきたように、ダンテに大きな影響を及ぼしたカンツォーネ *Al cor gentil reppaira*のみならず、*Donna, l’amor mi sforza*（および部分的には *Madonna, il fino amor*）にもシチリア派的な直喩に基づく聯構成が踏襲されている。この構成原理はジャコモに遡るものであろうが、グイニツェツリグイニツェツリの直喩は次第にグイド・デッレ・コロネネ的な色彩を強めていったと思われる。

*

グイニツェツリグイニツェツリが導入した「革新」を批判するためにボナジュンタが彼に書き送ったソネット——すでに上で見た *Voi, ch’avete mutata* ——に今一度視線をもどそう。ボナジュンタが語る、グイニツェツリグイニツェツリによる「革新」をダンテは *Al cor gentil reppaira* と結びつけながら読み解いたと思われるが、その一方でこのカンツォーネの作品としての実体がきわめてシチリア的であるなら、この矛盾が避けがたく意味するのはその「革新」が幻想にすぎなかったことであろう。言い換えれば、ダンテが文学史上あまりに重要な地位を占

めることになった結果、彼の個人的かつ主観的な解釈・読みが文学史に投影されて、あたかも史的現実であるかのような印象を作り上げてしまったということである。こうした認識に立って、ボナジュンタ・グイニツェッリ間の「論争」(tenzone)——ソネットを通じての議論——の意義を計り直して大幅に軽減し、さらに一步進めて2人の詩的言語が実質的に同じであると主張するジュンタの研究が公にされた⁸⁴⁾。そのような見方は、ボナジュンタもグイニツェッリもともに、シチリアの詩のイタリア大陸部への移植者として性格づけることを含意しているが、興味深いのはボナジュンタのうちにもジャコモやグイド・デッレ・コロンネ的な直喩が容易に見出されることである。

[De] dentro da la nieve esce lo foco,
adimorando ne la sua gialura,
e vince là lo sole a poco a poco:
divien cristallo l'aigua, tant'è dura;
e quella fiamma si parte da loco,
e[n]contra de la sua prima natura;
e voi, madonna, lo tenete a gioco:
com' più vi prego, più mi state dura.

Ma questo ag[g]io veduto: per istando
l'acerbo pomo in dolce ritornare;
ma vostro core già non s'inamora.
La dolce cera veda, pur clamando
li augelli vi invitano d'amare:
amar conven la dolce criatura.⁸⁵⁾

雪の中からは火が生まれます、もし雪が自らの冷たさにとどまり続け[水晶に変化し、一種のレンズにな]るならば。そうなると雪は太陽に少しずつ勝るようになります。水だったものは[雪や氷の段階を越えて冷やされると]水晶に変わり、非常に固くなるからです。そして、そこからあの火が発せられることになるのですが、それは[水としてもっていた]最初の本性に反することなのです。貴婦人よ、しかしあなたはそのような現象をまじめに考えようともなさいません。私が懇

願すればするほど、ますます私には頑なにおなりになるからです。待つことによって苦い実が甘く変わるのを私は見たことがあります。しかし、あなたの心だけは決して恋に陥りません。小鳥たちが始終歌いながら愛へとあなたを誘っているのを、甘美なる顔ばせよ、ご覧になってください。麗しき人は愛さねばならないのです。

ソネット前半部の意図は1) 反対物に転化する自然現象と2) 態度を反転させない貴婦人を並列・対置することであろう（この並列・対置は、「渋みを失い甘くなる果実」を道具として後半部でもう一度繰り返される）が、全体の雰囲気としてはグイド・デッレ・コロネネ的でありながらも、細部のことば遣いには、コンティーニも指摘しているように⁸⁶⁾、ジャコモの影響が感じられる。実際、ボナジュンタの書き出しは、ジャコモ *A l'aire claro*（本稿末「参考資料」掲載）の4行目「冷たい雪が熱を発生させるのを（見たことがある）」（*e freda neve rendere calore*）に類似している。因みに、ボナジュンタの10行目もジャコモの同じソネット6行目「苦いものから甘みが発せられるのを（見たことがある）」（*de l'amare rendere dolzore*）と関連づけられよう。

シチリア的直喩の例は、ボナジュンタのソネットばかりではなく、カンツォーネの聯にも見出される（以下に挙げるのは *Avegna che partensa* の第2聯だが、このカンツォーネの全文は本稿末「参考資料」に掲げる）。

La gio' ch'eo perdo e lasso,
 mi strugg' e mi consuma
 como candela ch'a foco s'accende; 15
 e sono stanch' e lasso:
 meo foco non alluma,
 ma quando più ci a fanno, men s'apprende;
 e non risprende -- alcuna mia vertude,
 avanti si conchiude, 20
 sì come l'aire quando va tardando,
 e come l'aigua viva,
 ch'alor' è morta e priva

quando si va del corso disviando.

失いなくした喜びのせいで、私はあたかも火がともされた蠟燭のように、溶けて消滅してゆく。私は疲労困憊している。私の火は燃えず、燃やそうと躍起になるほど、火がつかない。私の活力は輝きを発するどころか、むしろ晩の空のように闇に包まれ、ちょうど、道筋からはずれると淀み、動きを失う流水のように尽きてしまう。

「私」を「火がともされた蠟燭」になぞらえた直後に「私の火は燃えない」と言えば矛盾に陥り、最初の直喩の効果を弱めることにはなるまいか。ともあれ、ここではボナジュンタの直喩が効果的に働いているかは度外視するが、「私」の状態を説明するのに3度の直喩（15、21、22行目に“como”ないしは“come”によって導入）が用いられているのは、グイニツェッリ *Al cor gentil reppaira* の第1聯と似た趣である。そこでは、愛と高貴な心の関係が、やはり1) 森と鳥、2) 太陽とその光、3) 火の輝きと熱の関係と3重に重ね合わせることによって説明されていたからである。直喩の3度の使用という点では、ボナジュンタの上の聯をジャコモ *Madonna, dir vo voglio* の第3聯と比較してみることも可能であろう（ただし、すでに見たように、ジャコモでは3番目のものは聯末にあつて直喩としての十全な形式に達していない）。この比較で興味深いのは、ジャコモ（48行目）とボナジュンタ（19行目）が押韻語（s'ap(p)rende）を共有していることであろう。ジャコモにあつては“s'aprende”＝「しがみつく、つかまる」の意味で用いられているのに対して、ボナジュンタにあつては“s'apprende”＝「燃え上がる」の意味で用いられているという違いはあるが、“s'ap(p)rende”がジャコモでは“rirende”（44行目、「非難する」）、ボナジュンタでは“risrende”（19行目、「輝く」）とほぼ同形の単語と押韻し、「富裕韻」（rima ricca）——強勢母音より前の位置にも共通する音素（この場合は‘pr’）を有する韻——を形成している（因みに、ジャコモはソネット *Si come il sol* でも“aprende”を用いて「冗長韻」かつ「同一・曖昧韻」を踏んでいるが、これについては前掲拙論第1節を

参照)。だが、“s’aprende”を同じ「燃え上がる」という意味で用いて押韻しているのはグイニツェッリ *Al cor gentil rempaira* (11行目)である。*Al cor gentil rempaira* との類似はさらに、南仏語法の「水」(aigua)が使用されている点にも観察される(ボナジュンタ 22行目、グイニツェッリ 26、39行目。だが、ボナジュンタの上のソネット 4行目、グイド・デッレ・コロネ *Ancor che l’aigua* の冒頭やその他の箇所でも、この語形が使われている)。他方、“consuma”と“alluma”(ボナジュンタ 14、17行目)による押韻は、再びジャコモ *Madonna, dir vo voglio* と関連づけられるべきだろう⁸⁷⁾。ジャコモの 25-26行目には同じ押韻語が使用されているからである(因みに、グイニツェッリ *Donna, l’amor mi sforza* 11行目では“consomare”が用いられていた)。また、「火のついた蠟燭」および動詞“(di)struggere”の使用は、グイド・デッレ・コロネ *La mia vit’è* (全文は本稿末「参考資料」に掲げる)の 3行目「それどころか、私は火にかざされた蠟のように溶けてゆく、崩壊してゆく」(anzi distrug[g]lo como al foco cera) が残していった刻印であろう⁸⁸⁾。

ボナジュンタにおけるシチリア的「詩法」の点で興味深いのは、次のソネットの伝承に関する状況である。

Di penne di paone e d’altre assai
vistita, la corniglia a corte andau;
ma no lasciava già per ciò lo crai,
e, a riguardo, sempre cornigliau;
gli auscelli che la sguàrdar, molto splai
de le lor penne, ch’essa li furau:
lo furto le ritorna scherme e guai,
che ciascun di sua pen[n]a la spogliau.

Per te lo dico, novo canzonero,
che ti vesti le penne del Notaro,
e vai furando lo detto stranero:
sì co’ gli agei la corniglia spogliaro,
spoglieriati per falso menzonero,
se fosse vivo, Iacopo Notaro.⁸⁹⁾

孔雀の羽やその他多くの羽を身につけて鳥は法廷に出かけたが、だ

からといって鳴き声を捨てるわけにはゆかず、皆の面前で、相変わらずカアカア鳴いた。それを見た鳥たちは、鳥が自分たちの羽を盗んだことで、大いに気分を害した。そして、盗みは鳥に嘲笑と嘆きをもたらす羽目となった。各々の鳥が自分の羽を鳥からむしりとったからだ。若造のヘボ詩人よ、おまえのために言っているのだぞ。おまえは「公証人」の羽(=ペン)を身にまとい、他人の詩から盗んでいるのだから。鳥たちが鳥から羽をむしりとったように、「公証人」ジャコモが生きていたなら、彼はおまえを欺瞞に満ちた嘘つき扱いし、おまえから羽をむしりとることだろう。

上のソネットを『ヴァティカン詞華集』(Vaticano latino 3793)はキアロー・ダヴァンツァーティの作としているが、キアローの名前は1500年代に後から書き加えられたものにすぎない。他方、ベンボが作成させた別の写本(Vaticano latino 3214)は、ソネットを医師フランチェスコ(maestro Francesco)の作とし、ボナジュンタに書き送られたものとしている。メニケッティは、年少のフランチェスコが年長のボナジュンタを「若造のヘボ詩人」と呼ぶところに Vaticano latino 3214 の作品帰属の難点があると考えているが⁹⁰⁾、ここで関心を惹くのはむしろ、1500年代のある写字生の目には、ボナジュンタの作品の中にジャコモに由来する要素が見えすぎて、彼が「公証人」の剽窃者と呼ばれても不合理ではないと映ったという事実である。ボナジュンタにおけるシチリア派的要素の指摘は、ここでは、ごく目立つものを拾ってみたにすぎず、この写字生の目に狂いがなかったかは、ボナジュンタの作品をいっそう詳細かつ網羅的に調査することによって確認されるであろう。他方、グイニツェッリに関しても調査は網羅的に行なわれたわけではなく、ダンテに強い影響を及ぼしたいくつかの作品に焦点をあててシチリア的性格を指摘したにすぎない。ここでの考察が覚書にすぎない所以である。両詩人に関する筆者の研究はようやく緒についたばかりであり、今後さらに深めてゆかなければならない。シチリア派との関係においてだけではなく、グイッ

トーネとのそれ、「新優美体」とのそれをも視野に含めながら。

(参考資料)

ピエル・デッラ・ヴィツニヤ

Amando con fin core e con speranza, di grande gio' fidanza donòmi Amor più ch'eo no meritai, che m'inalzao coralmente d'amanza, da la cui rimembranza	5
lo meo corag[g]io non diparto mai, e non poria partire per tutto 'l meo volere, sì m'e[ste] sua figura al core impressa, ancor mi sia partente da lei corporalmente la Morte amara, crudele ed ingressa.	10
La Morte m'este amara, che l'amore mutòmi in amare; crudele, che punio senza pensare la sublimata stella de l'albore senza colpa a tutore, per cui servire mi credea salvare; ingressa m'è la Morte per afretosa sorte, non astettando fine naturale di quella in cui Natura mise tutta misura for che termin di morte corporale.	15
Per tal termino mi compiangio e doglio, perdo gioia e mi svoglio quando s'ua contezza mi rimembra di quella ch' io amare e servir soglio: di ciò viver non voglio, ma dipartire l'alma da le membra. E faria ciò ch'eo dico,	20 25 30

se non ch'a lo nemico
 che m'ha tolta madonna plageria,
 cioè la Morte fera,
 che non guarda cui fera: 35
 per lei podire aucire eo moriria.

No la posso aucire, né vengiamiento
 prendere al meo talento,
 più che darmi conforto e bona voglia,
 ed ancor no mi sia a piacimento 40
 nessun confortamento,
 tanto conforto ch'io vivo in doglia.

Donqua vivendo eo
 ve[n]gio del danno meo,
 servendo Amor ch'a la Morte fa guerra; 45
 e a lui servirag[g]io
 mentre ch'eo viverag[g]io:
 in suo domìn' rimembranza mi serra.

Rimembranza mi serra in suo domìno,
 unde ver' lui mi 'nchino, 50
 merzé chiamando [a] Amore che mi vaglia:
 vagliami Amore per cui non rifino,
 ma senza spene affino,
 ch'a lui servendo, gio' m'è la travaglia.

Donimi alcuna spene, 55
 ma di cui mi sovene
 non voi' che men per morte mi sovegna,
 di quella in cui fôr mise
 tutte bellezz' e assise,
 senza le quale Amore in me non regna.⁹¹⁾ 60

希望を抱き、偽りのない心で愛する私に、いとしい人は大きな喜びを約束してくれました、私にふさわしい以上の大きな喜びを。いとしい人は愛によって内面から私を高めてくれました。彼女の思い出から、決して心を引き離すことができないでしょう。たとえ望んでも、引き離すことはできないでしょう。彼女の姿がそれほどまでに胸にはつきりと刻印されているのです。たとえ、酷く邪悪で辛い死によって、体は彼女から離されたとしても。

愛を苦しみに変えた死は、私には過酷です。無情にも、死は考えも

せず暁のhigh星を罰しました。星にはいかなる時も落ち度はなかったのに。あの星に仕えることによって、私は救われると思っていました。あまりに早い宿命によって死は私にとって辛いものとなりました。あの人の自然な終わりを待つことさえしてくれませんでした。肉体の死の刻限を例外とするなら、自然は彼女の中にあらゆる調和を宿らせたというのに。

あのような夭折を私は嘆き悲しみます。私は喜びを失います。私が愛し仕えるのを常としたあの人の美しさを思い出す時には、気力も失せてしまいます。そのため、私は生きていることを望まず、四肢から魂を引き離すことを望みます。私からいとしい人を奪った敵を喜ばせることにならなければ、私は言ったとおりにするでしょう。敵とは、すなわち、酷い死のことですが、誰彼の見境もなく襲いかかります。死を抹殺できるなら、私は命を捨てることでしよう。

自分を元気づけ機嫌を直すどころか、私には死を抹殺することも、思いどおりに罰することもできません。いかなる励ましも私にはありがたくありません。それでも私は元気で、苦しみの中で生きています。だから、生きて私は自分が受けた害の復讐を果たしましょう、死と戦う愛神に仕えることによって。命あるかぎり、愛神に仕えましょう。思い出は、私が愛の支配からはずれることを許しません。

思い出は、私が愛の支配からはずれることを許しません。それゆえ、私は愛神に臣従し、助けてくださいと懇願するのです。愛への懇願を私はやめませんが、その愛が私を助けてくださいますように。しかし、私は希望も抱かずに自分を高めています。愛に仕える時には、苦しみも喜びだからです。希望を与えてください。でも、忘れられないあの人を、死んだから少しは忘れたいなどとは思いません。すべての美を宿し集めていたあの人を [少しは忘れたいなどとは思いません]。あの美がなければ、愛は私の中には宿りません。

ジャコモ・ダ・レンティーニ

Al'aire claro ò vista ploggia dare,

ed a lo scuro rendere clarore;
 e foco arzente ghiaccia diventare,
 e freda neve rendere calore;
 e dolze cose molto amareare,
 e de l'amare rendere dolzore;
 e dui guerrerer in fina pace stare,
 e 'ntra dui amici nascereci errore.

Ed ò vista d'Amor -- cosa più forte,
 ch'era feruto e sanòmi ferendo;
 lo foco donde ardea stutò con foco.
 La vita che mi dè fue la mia morte;
 lo foco che mi stinse, ora ne 'ncendo,
 d'amor mi trasse e misemi in su' loco.⁹²⁾

晴れた空が雨を降らし、曇った暗い空が光を放つを見たことがある。燃える火が氷に変わり、冷たい雪が熱を発生させるのを、見たことがある。甘いものがたいへんな苦味となり、苦いものが甘味に変化するのを、見たことがある。2人の敵がいささかも争わず平和に暮らし、2人の友の間に反目が生じるのを、見たことがある。

これらに優って不可思議なることが愛神によって生じるのを、私は見たことがある。私は傷を負っていたが、愛神は撃ちながら私を癒した。愛神は火をもって、わが身を焼く火を消したのである。[だが] 愛神が私に授けてくれた命こそ、わが死にほかならなかった。愛神が消してくれた火のせいで、いま私は燃えている。あの火が私を愛から引き離し、また愛の場所へと導いたのである。

ガイド・グイニツツェツリ

Madonna, il fino amor ched eo vo porto
 mi dona sì gran gioia ed allegranza
 (ch'aver mi par d'Amore)
 che d'ogni parte m'aduce conforto,
 quando mi membra di voi la 'ntendenza,
 a farmi di valore,
 a ciò che la natura mia me mina
 ad esser di voi, fina,
 così distrettamente innamorato

che mai in altro lato	10
Amor non mi pò dar fin piagimento: anzi d'aver m'allegra ogni tormento.	
Dar allegrezza amorosa natura senz'esser l'omo a dover gioi compire, inganno mi simiglia:	15
ch'Amor, quand'è di propia ventura, di sua natura adopera il morire, così gran foco piglia;	
ed eo, che son di tale amor sorpreso, tegnom' a grave miso	20
e non so che natura dé compire, se non ch'audit' ho dire che 'n quello amare è periglioso inganno che l'omo a far diletta e porta danno.	
Sottil voglia vi poteria mostrare	25
come di voi m'ha priso amore amaro, ma ciò dire non voglio, ché 'n tutte guise vi deggio laudare: per ch'e' più dispietosa vo'n declaro se blasmo vo'nde toglio.	30
Fiemi forse men danno a sofferire, ch'Amor pur fa bandire che tutta scanoscenza sia in bando, e che ritrae 'l comando	
a l'acusanza di cului c'ha 'l male: ma voi non blasmeria; istia, se vale.	35
Madonna, da voi tegno ed ho 'l valore; questo m'avene, stando voi presente, che perd' ogni vertute:	
ché le cose propinque al lor fattore si parten volentero e tostamente per gire u' son nascute;	40
da me fanno partut' e vène 'n voi, là u' son tutte e plui;	
e ciò vedemo fare a ciascheduno, ch'el si mette 'n comuno	45
più volentieri tra li assai e boni, che non stan sol', se 'n ria parte no i poni.	
In quella parte sotto tramontana	

- sono li monti de la calamita, 50
 che dan vertud' all'aire
 di trar lo ferro; ma perch'è lontana,
 vòle di simil petra aver aita
 per farl' adoperare,
 che si dirizzi l'ago ver' la stella. 55
 Ma voi pur sète quella
 che possedete i monti del valore,
 unde si spande amore;
 e già per lontananza non è vano,
 ché senz' aita adopera lontano. 60
 Ahi Deo, non so ch'e' faccia ni 'n qual guisa,
 ché ciascun giorno canto a l'avenente,
 e 'ntenderme non pare:
 ché 'n lei non trovo alcuna bona entisa
 und' ardisc' a mandare umilmente 65
 a lei merzé chiamare;
 e saccio ch'ogni saggio e' porto fino
 d'Amor che m'ha 'n dimino,
 ch'ogni parola che a ciò fòri porto
 pare uno corpo morto 70
 feruto a la sconfitta del meo core,
 che fugge la battaglia u' vince Amore.
 Madonna, le parole ch'eo vo dico
 mostrano che 'n me sia dismisura
 d'ogni forfalsitade; 75
 né 'n voi trova merzé ciò che fatico,
 né par ch'Amor possa per me drittura
 sor vostra potestade;
 né posso onqua sentire unde m'avene,
 se non ch'e' penso bene 80
 ch'Amor non porì avere in voi amanza;
 e credolo 'n certanza,
 ch'elo vo dica: «Te.llo innamorato,
 ch'a la fine poi mora disamato».
 D'ora 'n avanti parto lo cantare 85
 da me, ma non l'amare,
 e stia ormai in vostra canoscenza⁹³⁾
 lo don di benvoglienza,
 ch'i' credo aver per voi tanto 'narrato:

se ben si paga, molto è l'acquistato.⁹⁴⁾

90

貴婦人よ、あなたに寄せる私の至純の愛が大きな歓喜を与え、大きく心を浮き立たせてくれます（愛の神に由来する歓喜、愛の神に由来する心の高揚のようです）。そのため、あなたへの愛を思い出す時には、気高くあれ徳高くあれと、四方八方から私への励ましが寄せられます。かくして、私はわが本性に導かれて、完璧なる婦人よ、あなたを深く愛します。別の場所（＝別の婦人のもと）では、愛は私に申し分のない喜びをもたらしません。いやそれどころか、[あなたのためならば]あらゆる辛酸を嘗めることすら私は喜びとするでしょう。

人が歓喜[をもたらす願い＝性的願望?]を叶えられずにいるというのに、愛の本性が心を浮き立たせてくれるというのは、偽りであるように思われます。なぜなら、愛が自らの掟にしたがう時には、通常その本性により死を惹き起こすものだからです。それほどまでに烈しい炎[＝性的情念?]に人はとりつかれるのです。そして、そのような[通常は死をもたらす]愛にとりつかれた私は自分が深刻な危機に瀕していると考えますが、[愛の]本性が最後に何を惹き起こそうとしているのかは分かりません。ただ噂に聞いたところによれば、する時には楽しくても[同時にまた?]苦しみを惹き起こす、あのような[官能的な?]愛には危険な偽りが隠されているとのこと。

卑しい願いであるなら、私をとらえているのはあなたに対する苦渋に満ちた愛だと、あなたに知らせることもできるでしょう。しかし、私はそのようなことを語ろうとは望みません。あらゆる仕方であなただを讃えねばならないからです。にもかかわらず、苦渋に満ちた愛のことであなたを責めなければ、[実際には逆説的に]あなたがますます冷たい婦人だと私は明かすことにはなりますが。おそらくは、耐えた方が私には苦しみは少ないでしょう。愛の神がいつも明らかになさっているのは、すべての卑しい振舞いが追放されるようにということだからです。また、苦しむ者が嘆くなら、その者を臣下とすることをやめるとも公言なさっておられるからです。しかし、愛の神があなたをお責めになることはありますまい。苦しむ者は、できるなら、そのま

までいるがよい。

貴婦人よ、私に徳があるなら、それを授けてくださったのはあなたです。[にもかかわらず、]あなたを前にすると、わが身に起きるのは、すべての徳を失うということです。万物は、その創り手に近づくと、すばやく自ら動きだし、生まれた場所に移ろうとするからです。徳は私の許^{もと}を去り、あなたの許に参じますが、あなたのうちにはすべての徳が最高度に宿っています。各人がそのような振舞いをすることも、私たちは目に見て知っています。なぜなら、各人は孤立しているよりは、たくさんの善良な者とすすんでいっしょにしようとするからです。もし、[無理にも]悪人たちといっしょにするなら話は別ですが。

北のあの地方には磁石の山があり、空気に鉄を惹きつける力を伝えます。しかし、その地方は遠いので、鉄を働かせ、針が北極星の方を向くようにするためには、空気は同じ石(=磁石)からの援助を必要とします。しかし、あなたは徳の山を所有する唯一の女性であり、その山から愛が広がります。あなたの徳[の力]は遠く隔たっていても無効とはなりません。援けがなくとも遠くまで作用を及ぼします。

ああ神よ、何をどうしたらいいのか分かりません。麗しき婦人のために私は毎日歌うのに、彼女は私に耳を傾けてくれるとは見えません。彼女のうちには好意的な関心を見出すことができず、それゆえ、平身低頭して憐れみを乞うため、私は思い切って彼女にことばをさし向けるのです。確かなことは、私を支配する愛神を私がすべて完全に知り抜いていること、[にもかかわらず]その[=憐れみを乞う?]ために私が発することばはすべて瀕死の傷を受けた肉体のように思われることです。愛神が勝利する戦いにおいてわが胸がうち破られた時、致命の傷を帯びて敗走した肉体です。

貴婦人よ、あなたに語る私のことばが明らかにしているはずですが、私のうちには桁外れのすべての誠実さが宿っていると。[にもかかわらず]私が苦勞しながら生みだすもの(=作品・詩)はあなたのうちに憐れみを見出すことができません。強いあなたに対しては、愛神といえども、私のために力を及ぼすことができないようです。なにゆえ私

がこんな目に会うのか、私には決してわかりませんが、思うにきつと、愛はあなたのうちに愛情を生みだすことができないのでしょうか。それどころか、私が信じて疑いません、愛の神があなたに命じているのでしよう、「あの男を恋に陥ったまま縛っておくがよい、やがて最後に愛されることなく死んでゆく時まで」と。

私は今後、歌うことはやめますが、愛することはやめません。思うに、私は好意という貢物をたくさんの手付け金のようにして、あなたのために捧げたはずですが、その貢物のことをもう賢明なるあなたがお考えくださいますように（?もうあなたが感謝してくださいますように?）! たっぷりと報われるなら、儲けは多いものです。

グイド・デッレ・コロンネ

Ancor che l'aigua per lo foco lassi
 la sua grande freddura,
 non cangerea natura
 s'alcun vasello in mezzo non vi stasse,
 anzi averria senza lunga dimora 5
 che lo foco astutasse
 o che l'aigua seccasse:
 ma per lo mezzo l'uno e l'altro dura.
 Cusì, gentil criatura,
 in me ha mostrato Amore 10
 l'ardente suo valore,
 che senza amore er'aigua fredda e ghiaccia:
 ma Amor m'ha allumato
 di fiamma che m'abbraccia,
 ch'eo fora consumato 15
 se voi, donna sovrana,
 non fustici mezzana
 infra l'Amore e meve,
 che fa lo foco nascere di neve.
 Imagine di neve si pò dire 20
 om che no ha sentore
 d'amoroso calore:
 ancor sia vivo, non si sa sbaudire.
 Amore è uno spirito d'ardore,

che non si pò vedere, 25
 ma sol per li sospiri
 si fa sentire in quel ch'è amadore:
 cusì, donna d'aunore,
 lo meo gran sospirare
 vi poria certa fare 30
 de l'amorosa flamma und'eo so' involto.
 Ma non so com'eo duro,
 sù m'ave preso e tolto;
 ma parm'esser sicuro
 che molti altri amanti 35
 per amor tutti quanti
 funo perduti a morte,
 che no amâro quant'eo né sù forte.
 Eo v'amo tanto che mille fiate
 in un'or si m'arranca 40
 lo spirito che manca,
 pensando, donna, le vostre beltate;
 e lo disio c'ho lo cor m'abranca,
 crescemì volontate,
 mettemi 'n tempestate 45
 ognu pensieri che mai non si stanca.
 O colorita e bianca
 gioia de lo meo bene,
 speranza mi mantene,
 e s'eo languisco, non posso morire: 50
 ca, mentre viva sete,
 eo non poria fallire,
 ancor che fame e sete
 lo corpo meo tormenti;
 ma sol ch'eo tegna menti 55
 vostra gaia persona,
 obbrio la morte, tal forza mi dona.
 Eo non credo sia [già] quel[lo] ch'avìa,
 lo spirito che porto,
 ched eo fora già morto, 60
 tant'ho passato male tuttavia:
 lo spirito ch'i' aggio, und'eo mi sporto,
 credo lo vostro sia,
 che nel meo petto stia

- e abiti con meco in gran diporto. 65
 Or mi son bene accorto,
 quando da voi mi venni,
 che quando mente tenni
 vostro amoroso viso netto e chiaro,
 li vostri occhi piagenti 70
 allora m'addobbraro,
 che mi tennero menti
 e diedermi nascoso
 uno spirto amoroso,
 ch'assai mi fa più amare 75
 che no amò null'altro, ciò mi pare.
 La calamita contano i saccenti
 che trare non poria
 lo ferro per maestria,
 se no che l'aire in mezzo le 'l consenti. 80
 Ancor che calamita petra sia,
 l'altre petre neenti
 non son cusì potenti
 a traier perché non hano bailia.
 Così, madonna mia, 85
 Amor s'è apperceptuto
 che non m'avria potuto
 traer' a sé se non fusse per voi;
 e sì son donne assai,
 ma no nulla per cui 90
 eo mi movesse mai,
 se non per voi, piagente,
 in cui è fermamente
 la forza e la vertuti.
 Adonque prego l'Amor che m'aiuti.⁹⁵⁾ 95

火によって水は冷たさを失うというけれど、両者の間に容器がなければ、水は性質を変えたりしないでしょう。それどころか、火が消える、あるいは水が乾いてなくなるの、いずれかでしょう。中間に置かれる容器のお蔭で、両者はともに持続します。貴婦人よ、ちょうどそのように、愛は私に対して炎のような力を示しました。愛さない時の私は冷たい水であり氷であったのですが。しかし、愛は私を包む炎で燃やし、消滅させたことでしょう、もしも、最高の人よ、あなたが

愛と私の間に入ってくれなかったなら。愛は雪 [のように冷たい心] から [情熱の] 火を生みだします。

愛の炎を感じない者は雪像にも等しいと言えるでしょう。愛とは炎の精であり、目には見えません。ただ恋する者の溜息を通じてのみ感じられるのです。だから、敬うべき人よ、私の深い溜息から、私をとり囲む愛の炎をはっきりと知ることができるでしょう。しかし、自分がどうして生き延びているのかは分かりません。愛の炎はそれほどまでに私をとらえ放さないのです。しかし、確かと思われることは、ほかの多くの恋人たちはすべて愛が原因で死滅したということです。私ほどたくさん、私ほど激しく愛することもなかったのに。

貴婦人よ、私はあなたを激しく愛しているから、あなたの美しさを思うと、すでに消えそうな魂が一時間に千度も私から奪い去られます。私の抱いている情熱が胸を締めつけ、願いが募り、決してやむことのない思いが私を嵐に晒します。ああ、私に喜びをもたらす白く血色のよい人 (=喜び、宝石) よ、たとえやつれても、私は死にません。あなたが生きておいでの間は、たとえ飢えや渇きに身を苛まれても、死ぬことはありません。ただ麗しいあなたのことを思っただけで、私は死を忘れます。[あなたのことを思うと] それほどまでの力が授けられるのです。

いま私に宿っている魂は、かつて宿っていた魂と同じだとは思えません。私はすでに息絶えているはずですが、それほどまでに絶え間なく苦しみを味わってきたからです。いま私に宿り、私を動かしている魂はあなたの魂だと思うのです。私の胸に宿り、たいそう楽しみながら私とともに暮らしているのだと思います。あなたから離れた時に、私にははっきりとわかったのです、あなたの麗しく澄んだ輝く顔を見た時、あなたの美しい目が私の魂を倍にしてくれたのだと。あなたの目が私の心をとらえ、密かに愛の魂を与えてくれたのです。思うに、その愛の魂のせいで、かつて恋した誰よりも、私はもっと激しく愛するのです。

賢者らの語るところによると、磁石はいかに力を発揮しても鉄を引

きつけることはできないでしょう、もし間にある空気がそれを許さないならば。磁石は石にすぎないとしても、ほかのどのような石も同じように [鉄を] 引きつけることはまったくできません。牽引力をもたないからです。貴婦人よ、ちょうど同じように、あなたがいなければ、私を引きつけることはできなかつただろうと、愛は気づいたのでした。確かに婦人は大勢いますが、私を [引きつけて] 動かすような女性は、麗しき人よ、あなたを除けば誰もおりません。あなたの中には [不思議な] 力や効能がしっかりと宿っています。だから、私は愛の神に助けてくださいと懇願するのです。

ガイド・デッレ・コロンネ

Amor, che lungiamente m'hai menato
a freno stretto senza riposanza,
alarga le toi retene in pietanza,
ché soperchianza -- m'ha vinto e stancato:
c'ho più durato - ch'eo non ho possanza, 5
per voi, madonna, a cui porto lianza
più che no fa assessino asorcotato,
che si lassa morir per sua credanza.
Ben este afanno dilittoso amare,
e dolze pena ben si pò chiamare: 10
ma voi, madonna, de la mia travaglia,
così mi squaglia, -- prèndavo merzede,
ché bene è dolze mal, se no m'auzide.
Oì dolze cera con guardi soavi,
più bella d'altra che sia in vostra terra, 15
traiete lo meo core ormai di guerra,
che per voi erra -- e gran travaglia 'nd' ave;
ca s' gran travi -- poco ferro serra
e poca piog[gl]ia grande vento aterra:
però, madonna, non vi 'ncresca e grave, 20
s' Amor vi sforza, ch'ogni cosa inserra.
E certo no gli è troppo disinore,
quand'omo è vinto d'uno suo migliore,
e tanto più d'Amor che vince tutto;
perciò non dótto -- c'Amor non vi smova: 25

saggio guerrieri vince guerra e prova.
 Non dico c'a la vostra gran bellezza
 orgoglio non convegna e stiale bene,
 c'a bella donna orgoglio ben convene,
 che si mantene -- in pregio ed in grandezza. 30
 Troppa alterezza -- è quella che sconvene;
 di grande orgoglio mai ben non avene.
 Però, madonna, la vostra durezza
 convertasi in pietanza e si rinfreni:
 non si distenda tanto ch'io ne pèra. 35
 Lo sole è alto, e sì face lumera,
 e tanto più quanto 'n altura pare:
 vostr' argogliare - donqua e vostra altezze
 facciam prode e tornimi in dolcezze.
 I' allumo entro e sforzo, in far semblanza, 40
 di no mostrar zo che lo meo cor sente.
 Oi quant'è dura pena al cor dolente
 estar tacente -- e non far dimostranza:
 ché la pesanza -- a la cera consente,
 e fanno vista di lor portamenti 45
 (così son volentieri 'n acordanza)
 la cera co lo core insembremente.
 Forza di senno è quella che soverchia
 ardir di core, asconde ed incoverchia.
 Ben è gran senno, chi lo pote fare, 50
 saver celare -- ed essere signore
 de lo suo core quand'este 'n errore.
 Amor fa disviare li più saggi:
 e chi più ama men' ha in sé misura,
 più folle è quello che più s'innamora. 55
 Amor non cura -- di far suoi dannaggi,
 ch'a li coraggi -- mette tal calura
 che non pò rafreddare per freddura.
 Gli occhi a lo core sono gli messaggi
 de' suoi incominciamenti per natura. 60
 Dunqua, madonna, gli occhi e lo meo core
 avete in vostra mano, entro e di fore,
 c'Amor mi sbatte e smena, che no abento,
 sì come vento -- smena nave in onda:
 voi siete meo pannel che non affonda.⁹⁶⁾ 65

愛神よ、おまえは絶えず手綱をきつく引き締めて長く私を御してきたが、お願いだから、手綱を緩めてくれ。過度の厳しさが私をうち負かし、疲労困憊に陥れた。貴婦人よ、私が自分に可能な以上に耐えてきたのは、あなたのためでした。[阿片を吸引して] 狂信的となった刺客は信義のためには躊躇なく命を捨てますが、そんな刺客にも勝る忠実さを私はあなたに寄せています。確かに、愛するとは喜びに満ちた苦しみであり、甘美な苦しみとも呼べるでしょう。しかし、私をかくも苛んでいる苦しみを、貴婦人よ、どうか憐れんでください。甘美な苦しみも、私の命を奪わないかぎりには、喜びなのですから。

やさしい目をした甘美なるかんばせ顔容)の人よ、あなたの国のほかの誰より麗しいあなたは、どうかもう私の胸を苦しみから解放してください。私の胸はあなたゆえに苦しみ、大きな苦悩を抱えております。小さな鉄の金具が太い梁を固定し、少し雨が降るだけで大風も鎮まります。だから、貴婦人よ、愛神が[ほんの少し] あなたに強いことがあっても、遺憾とは思わず嘆かないでください。愛はすべてのものを支配されるお方なのですから。自分に勝る者に負かされても、確かに、大きな不名誉ではありません。すべてにうち勝つ愛に負かされるなら、なおさら不名誉とはなりません。それゆえ私は疑わないのです、愛があなたの心を改めてくださると。知恵ある戦士は戦いや試練を乗り越えるものだからです。

たいそう美しいあなたに、冷たい態度はふさわしくない、あまり似合わないとは申しません。名声を失わず品位を保とうする麗しい婦人には、[確かに] 冷たい態度がよく似合うからです。しかし、ふさわしくないのは過度に冷たい態度であり、過度に冷たい態度からはよいことは決して生じません。それゆえ、貴婦人よ、あなたの冷たさに抑制を効かせ、憐れみへと転化させてください。その冷たさを、私が命絶えてしまうほど続けないでください。太陽は高く昇り、光をもたらしますが、高く上れば上るほど、より多くの光明を与えるものです。それゆえ、気高く振舞い冷たい態度をおとりになるあなたも、どうか私に益をもたらし、私に喜びを味わわせてください。

私の内側は火に燃えています、私は外見をつくろいながら、胸の思いを表わさないよう苦勞しています。ああ、黙したまま思いを表わさないとは、悲しむ心にとって、何という過酷な苦しみでしょう。それというもの、苦しみは進んで顔に表われ、顔と心はいっしょになって互いの連動を示すからです（顔と心はそれほどまでによく合致するものなのです）。知恵の力のみが大胆な心を抑え、心を包み隠してくれます。心が苦しんでいる時に心を統御し表に出ないようにすることがもし誰かにできるなら、それはまさに大きな知恵というものです。

愛というものは、もっともすぐれた賢者らにも道を誤らせませす。深く愛せば愛すほど人は自制を忘れ、もっとも深く愛する者がもっとも常軌を逸した者となるのです。愛神は自分がどのような苦しみを与えているのか一向に顧みることがなく、冷気にさらしても決して冷えない熱を心に生じさせませす。目は本性によって心の伝令となり、愛の始まりを告げ知らせませす。それゆえ、貴婦人よ、私の外側の目も内側の心も、すっかりあなたの手の中（＝支配下）に収めてください。愛が私を打ち動揺させて、私には安らぎもないからです。風に打たれて動揺する波間の船のような有様ですが、あなたこそが沈むことのないわが風見の旗なのです。

ボナジュンタ・オルビチャーニ

Avegna che partensa
 meo cor faccia sentire
 e gravosi tormenti sopportare,
 non lasserag[gi]o senza
 dolse cantare e dire 5
 una cusì gran gioia trapassare;
 e rallegrare -- altrui così feraggio
 del meo greve damaggio,
 per pianto in allegressa convertire,
 come fa la balena, 10
 che ['n] ciò che prende mena,
 la parte là u' dimora fa gioire.
 La gio' ch'eo perdo e lasso,

mi strugg' e mi consuma
 como candela ch'a foco s'accende; 15
 e sono stanch' e lasso:
 meo foco non alluma,
 ma quando più ci afanno, men s'apprende;
 e non risprende -- alcuna mia vertude,
 avanti si conchiude, 20
 sì come l'aire quando va tardando,
 e come l'aigua viva,
 ch'alor' è morta e priva
 quando si va del corso disviando.
 Disvìo sì, che bene 25
 sentor di me non aggio:
 non saccio com eo vivo sì gravoso.
 O Deo, ché non m'avene
 com' al leon selvaggio,
 che tutto tempo vive poderoso 30
 e odioso -- senza pietate,
 acciò che 'n veritate
 lo meo greve dolor mostrar potesse
 e la mia pen' agresta
 per opra manifesta, 35
 perché la gente mei' me lo credesse?
 Credo che non feràe
 lontana dimoransa
 lo core meo, che tanta pena dura:
 mentre che viveràe 40
 serà for di speranza
 d'aver giamai solasso né ventura.
 Ma se Natura, -- che 'nd'ha lo podere,
 n'avesse lo volere,
 appena mi poria donar conforto. 45
 Como l'augel che pia,
 lo me' cor piange e cria
 per la malvagia gente che m'ha morto.
 Morto fuss'eo pertanto,
 o nato non fuss'eo, 50
 o non sentisse ciò ch'eo vegg' e sento!
 perché 'l meo dolce canto
 amar mi torna e reo,

ed in erransa lo innamoramento.

Ma 'l bon talento -- ch'aggi' e 'l cor gioioso,

55

plagente e amoroso,

como la uliva non cangia verdura,

non cang'eo per ragione

di fina 'ntensione,

ancor mi sia cangiata la figura.⁹⁷⁾

60

別離のせいで私の心は悲しみ、つらい苦しみを受けてはいるが、[聞く者には] 大きな喜び [ともなりうる事柄] を優美に詩に歌うことな
くやりすぎすことはすまい。嘆きを歓喜に変えるべく、ちょうど鯨が
するように、私も自分の重い苦しみを主題にして聞く者 [の耳] を楽
しませよう。鯨は、自らが危機に瀕することによって、たどり着く岸
辺を喜ばせるものだから。

失いなくした喜びのせいで、私はあたかも火がともされた蝋燭のよ
うに、溶けて消滅してゆく。私は疲労困憊している。私の火は燃えず、
燃やそうと躍起になるほど、火がつかない。私の活力は輝きを発する
どころか、むしろ晩の空のように闇に包まれ、ちょうど、道筋からは
ずれると淀み、動きを失う流水のように尽きてしまう。

私は [たどるべき] 道筋から大きく逸れてしまい、正気をうまく保
つこともできない。こんなに苦しみなながらもどうして生きていられる
のか、私には分からない。ああ神よ、野生のライオンには生じることが、
どうして私には生じないのだろうか。強いライオンならば、いつも憐
れみを抱くことなく冷酷に暮らしてゆけるというのに。[強いライオン
のようにできるなら] 私もはつきりとした歌 (? 行動?) によって自
分の重い悲しみ、過酷な苦しみを正確に示し、聞く者の私に対する信
頼を一層深めることもできよう。

思うに、大きな苦しみに耐えている私の心は遠くにとどまり続ける
ことはあるまい (=心だけが彼女のもとに戻ってくるだろう)。[だが]
生きている限り、私の心は喜びや幸運に巡りあう希望を持ってないだろ
う。ただ、「自然」が欲するなら、「自然」にはそうするだけの能力が
あるから、かろうじて私を元気づけることができよう。さえざる小鳥
のように、私の心は泣き叫んでいる。私を破滅に追いやった悪意ある

者らのせいなのだ。

ああ、むしろ死ねたらいいのに。生まれてこなければ、よかったのに。いま目にし耳にしているを感じずにいられたら、よかったのに。それというのも、優美に歌っても、自分の歌は私には苦くつらいものとなり、恋も苦しみに変わってしまうから。だが、縁を失わないオリーブのように、私は自分が抱いている好意と美しい心（恋し喜びに高揚する心）を、至純の愛ゆえに、決して変えることはない。たとえ私の容姿が変わろうとも。

ガイド・デッレ・コロンネ

La mia vit'è sì fort'e dura e fera
 ch'eo non posso né viver né morire,
 anzi distrug[g]o come al foco cera
 e sto com'on che non si pò sentire;
 escito son del senno là uv'era 5
 e sono incuminciato ad infollire;
 ma ben mi poria campare
 quella per cui m'avene
 tutto questo penare:
 per bene amar -- lo meo cor si ritene. 10

Merzé faria sed ella m'aiutasse,
 da ch'eo per lei son così giudicato,
 e qualche bon conforto mi donasse,
 che[d] eo non fosse così alapidato;
 peccato faria s'ella mi lassasse 15
 esser sì fortemente condempnato,
 cad eo no mi trovo aiuto
 né chi mi dar conforto,
 und'eo sono ismarruto
 e venuto -- ne sono a male porto. 20

Se madonna sapesse lo martore
 e li tormenti là 'v'eo sono intrato,
 ben credo che mi daria lo suo amore,
 ch'eo l'ho sì fortemente goliato;
 più di null'altra cosa mi sta 'n core, 25
 sì ch'eo non ho riposo i[n] nullo lato:
 tanto mi tene distretto

ch[ed] eo non ho bailia,
 sto com'omo sconfitto,
 senza d[r]itto -- sono in mala via. 30
 Or con' farag[g]io, oi lasso adolorato,
 ched eo non trovo chi mi consigliare?
 Di tanto mondo quant'ag[g]io cercato
 nullo consiglio non posso trovare:
 a tut[t]i miei amici sono andato, 35
 dicono che non mi possono aiutare,
 se non quella c'ha valore
 di darmi morte e vita
 senza nullo tenere:
 lo suo amore -- m'è manna saporita. 40
 Va', canzonetta fresca e novella,
 a quella ch'è di tutte la corona,
 e va' saluta quell'alta donzella;
 di' ch'eo son servo de la sua persona
 e di' che per suo onor questo fac[c]'ella: 45
 trag[g]ami de le pene che mi dona;
 e faria gran caunoscenza,
 da che m'ha così preso,
 no mi lassi in perdenza,
 ch'eo non ho scienza, -- in tal doglia m'ha miso.⁹⁸⁾ 50

わが生はつらく苦しく過酷なので、私は生き〔続け〕ることもできなければ、〔即座に〕死ぬこともかなわない。それどころか、火にかざされた蠟のように私は溶けて崩壊してゆく。私は正気のうせた者のような状態にあり、以前は分別もあったのにその分別も失い、狂気に陥り始めてしまった。だが、こんな苦しみのすべてを私に惹き起こしている、まさに原因であるあの婦人^{ひと}ならば、きっと私を救うことができるだろう。深く愛することによって、私の心は忠実であり続ける。

私がかくなる苦しみを余儀なくされているのもあの婦人のせいなのだから、彼女が私を救ってくれるなら、慈悲深き振舞いとなるだろう。私が（あたかも投石を浴びるがごとき）苦しみに陥らないよう、もし彼女が私を少しやさしく励ましてくれるなら〔、まさに憐れみの賜物であろう〕。だが、彼女がこのような激しい責め苦の中に私を放置するのなら、嘆かわしき振舞いであろう。それというもの、私には救いは見

あたらず、励ましてくれる者も見つからず、ために私は道に迷い、不幸の港に入りこんでしまったのだから。

私が入りこんでしまった苦悩と難儀をあの婦人が知っていたら、思うに、きっと私に彼女の愛を与えてくださることだろう、私があのように強く念願してきたあの愛を。ほかのどんなことよりも彼女は私の胸に宿り続け、ために私はどこに居ても決して安らぐことがない。彼女がしっかりと私を捕縛しているから、私は「自分固有の」主権を失ってしまい、あたかも戦いに敗れ[て捕虜となつ]た者のような有様だ。[自分本来の]権利も失い、私は受難の道を歩んでいる。

さあ、どうしたらいいのだろう。ああ悲しいかな、助言を与えてくれる者として見つからない。この世界をどれだけ捜し回ったとしても、私には助言のひとつも見つからない。すべての友のもとを訪ねてみたが、皆が言うのである、「君を救うことは、あの婦人でなければできないよ。君に対して生殺与奪の絶対的力をもっているあの婦人でなければ」と。彼女の愛こそが、私には味わいうまきマンナなのだ。

生まれたての年若きカンツォネッタよ、行け、すべての婦人の冠（＝女王）とも言うべきあの人のもとに。行って、かの卓越せる乙女に会釈し、語るがよい、私が彼女の下僕であることを。彼女が私に与えている苦しみから、彼女自身の名誉のために、どうか私を解放してくださいますように、と語るがよい。彼女は私をこのように俘虜としておられるが、その私を破滅に陥らないよう救ってくださいるなら、彼女はきわめて寛大・高貴な振舞いをするようになる（、と語るがよい）。それというのも、私にはもはや分別を失い果てて、かくなる苦しみに私を導いたのは彼女なのだから。

註

- 1) 本稿においても、拙論「ジャコモ・ダ・レンティーニにおけるマクロテキスト」において用いた略号を使用する。
- 2) Andreae Capellani regii Francorum “De amore” libri tres, a cura di S. Battaglia, Roma,

Perrella, 1947, pp.312-39.

- 3) G. Boccaccio, *Opere minori in volgare*, 4 voll., a cura di M. Marti, Milano, Rizzoli, 1969-72, Filocolo [vol.1], IV, 23-26 [pp.465-70].
- 4) P. Rajna, *L'episodio delle questioni d'amore nel Filocolo del Boccaccio*, in Id., *Scritti di filologia e linguistica italiana e romanza*, a cura di G. Lucchini, Roma, Salerno, 1998, pp.671-727 (alle pp.680-81). ライナは、ジャン・ブレテル (Jean Bretel) やアダン・ド・ジヴァンシー (Adan de Givenci) との類似を指摘してはいるが、アンドレアスには言及していない。なお、ライナの論文は、「Romania», XXXI 1902, pp.28-81 に初出したもの。
- 5) G. Boccaccio, *Filocolo*, a cura di A.E. Quaglio, in *Tutte le opere di G. B.*, vol.1, Milano, Mondadori, 1967, pp.45 sgg. (alle pp.856-57).
- 6) G. Boccaccio, *Filocolo*, in Id., *Decameron Filocolo Ameto Fiammetta*, a cura di E. Bianchi, C. Salinari e N. Sapegno, Milani-Napoli, Ricciardi, 1952 pp.765-899 (alle pp.839-45)。リッツォーリ版については註2を参照のこと。
- 7) ボッカッチョにおいてアンドレアスが材源として重要な役割を果たしている別の例としては、『フィロストラト』を挙げることができようが、この作品でも材源は「パルティメン」的なコンテクストにおいて活用されている。これについては、拙著『ダンテ研究 I』、東京、東信堂、1994年、128-29頁参照。
- 8) 『ジュンティ版古歌集』の正式名称は、*Sonetti e canzoni di diversi antichi Autori Toscani in dieci libri raccolte* (Firenze, Giunti, 1527)である。『ジュンティ版古歌集』の概略その他については、まずは V. Russo, “Giuntina di rime antiche”, in ED, III, pp.227-28を参照すればよからう。
- 9) A-M-A-M-Aの順序で「テンツォーネ」が展開したとの見解を最初に示したのは、S. Santangelo, *Dante Alighieri e Dante da Maiano*, in «Bollettino della Società Dantesca», n.s. XXVII (1920), pp.61 sgg. (ora in Id., *Saggi danteschi*, Padova, CEDAM, 1959, pp.5-19)であるが、F. Montabari, *L'esperienza poetica di Dante*, 2a ed., Firenze, Le Monnier, 1968, pp.2-3が支持しているほか、K. Foster and P. Boyd (ed.), *Dante's Lyric Poetry*, London etc., Oxford University Press, 1967, vol.1 (= text and translation), pp.4-11; vol.2 (= commentary), pp.6-19; A. Pézard (éd.), *Dante, Oeuvres complètes*, Paris, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1997, pp.111-20がサンタンジェロと同じ配列を採っている。他方、M-A-M-A-Mの順序は、*Le opere di D. Alighieri*, testo critico della Società Dantesca Italiana, a cura di B. Barbi et al., Firenze, R. Bemporad & figli, 1921, pp.67-69 (XLI - XLV); D. Alighieri, *Rime della «Vita Nuova» e della giovinezza*, a cura di M. Barbi e F. Maggini, Firenze, Le Monnier, 1956, pp.161-69; Rim., pp.300-08 (2, 2a, 3, 3a, 3b); Dante da Maiano, *Rime*, a cura di R. Bettarini, Firenze, Le Monnier, 1969, pp.152-63が採用し

- ているほか、最新の D. Alighieri, *Rime*, Edizione Nazionale, a cura di D. De Robertis, Società Dantesca Italiana - Le Lettere, 2002, 3 (= testi), pp.442-46 もこの配列を行なっている。
- 10) *Qual che voi siate*, vv.12-14, in Rim. 2a (XLII), p.303: certamente a mia coscienza pare, / chi non è amato, s'elli è amatore, / che 'n cor porti dolor senza paragio.
- 11) Rim., 3 (XLIII), vv.9-14.
- 12) M. Barbi e F. Maggini (a cura di), D. Alighieri, *Rime della «Vita Nuova» e della giovinezza* cit., p.166.
- 13) F. Montabari, L'esperienza poetica di Dante cit., pp.9-10.
- 14) 「テントゾーネ」および「パルティメン」の定義については、cfr. *Las Leys d'amors*, in C. Appel, *Provenzalische Chrestomathie*, Genève, Slatkine Reprints, 1974 (réimpression de l'édition de Leipzig, 1895), St. 124 (S. 199) を参照のこと。また、*Las Leys d'amors*, publié par J. Anglade, t.II, Toulouse, Privat, 1919 (New York-London, Johnson Reprint Corporation, 1971), pp.182-83 も併せて参照されたい。
- 15) Rim., 3a (XLIV), vv.9-14.
- 16) Rim., 3b (XLV), vv.9-14.
- 17) P. Rajna, *Tre studi per la storia del libro di Andrea Cappellano*, in Id., *Scritti di filologia e linguistica italiana e romanza* cit., pp.1403-79 (alle pp.1427-28)。ライナのこの研究は最初、「Studi di Filologia Romanza», V 1891, pp.193-265 に掲載された。
- 18) Cfr. Andreae Capellani “De amore” cit. praefatio (pp.2-3).
- 19) Cfr. VN, XXX, 3: questo mio primo amico a cui ciò scrivo。因みに、『キタ・ノワ』第30章のこの部分では、カヴァルカンティとダンテが言語選択に関する共通認識(=『キタ・ノワ』の執筆には俗語を用いること)を有していたことも語られている。
- 20) Cfr. VN, XXV, 10.
- 21) たとえば、ダンテは「俗語でもっとも優美かつ精緻に詩作した者たちは、たとえばチーノ・ダ・ピストイアとその友(=ダンテ本人)のように、イタリアの俗語に奉仕する者たちだったからである」(DVE, I, ii, 2: quod qui dulcius subtiliusque poetati vulgariter sunt, hii familiares et domestici sui [= linguae Latinorum] sunt, puta Cynus Pistoriensis et amicus eius)と書いて、チーノを高く評価すると同時に、自分とチーノを密接に結びつけている。また、「(いま問題としている俗語は)熟練した技によって高められたものと考えられる。なぜなら、イタリア人たちの多くの粗野な語彙、もつれた構文、欠陥に満ちた発音、鄙びた訛りの中から、かくも卓越した、明晰かつ完全に洗練された言語として引きだされたものだからである。それは、チーノ・ダ・ピストイアとその友が彼らのカンツォーネにおいてはつきりと示しているとおりでである」(DVE, I, xvii, 3: Magistratu quidem sublimatum videtur [vulgare de quo

locuimur], cum de tot rudibus Latinorum vocabulis, de tot perplexis constructionibus, de tot defectivis prolationibus, de tot rusticanis accentibus, tam egregium, tam extricatum, tam perfectum et tam urbanum videamus electum ut Cynus Pistoriensis et amicus eius ostendunt in cantionibus suis)においても、積極的評価の中でダンテとチーノが密接に結びつけられている。『俗語詩論』第2巻5章4には、11音節詩行の卓越性を理解し、カンツォーネの書き出しに11音節詩行を採用した「学識に満ちた詩人・巨匠たち」(doctores)とその作品が挙げられているが、リストを締めくくるのはチーノの *Non spero che giamai* とその友ダンテの *Amor, che movi* である。

22) Cfr. PD, II, pp.548-49.

23) 何がカヴァルカンティの不満の原因となったのか、そのさまざまな解釈については、G. Cavalcanti, *Rime*, a cura di D. De Robertis, Torino, Einaudi, 1986, pp.158-59 が詳細な展望をあたえてくれる。因みに、岩倉具忠、「ダンテの『俗語詩論』——「自己注解」としての解釈の試み——」、京都大学文学部研究紀要第24(1985年)、59-138頁(とくに115-17頁)は、不満の原因をダンテの政治路線および交際関係(フォレーゼ・ドナーティ)と見ている。

24) Cfr. DVE, II, ii, 8. 因みに、チーノに対する積極的評価の方が目立つために、カヴァルカンティの重要性が相対的に低下した印象が抱かれるが、『俗語詩論』でもカヴァルカンティは決して否定的に評価されているわけではない。「しかし、ほとんどすべてのトスカーナ人が自らの醜悪な言語の中で無感覚化しているとはいえ、何人かの者たちが卓越した俗語を知っていたと考えられる。すなわち、フィレンツェ出身のガイド[・カヴァルカンティ]、ラーポ[・ジャンニ] およびもうひとりの者[=ダンテ本人]、ピストイア出身のチーノらである。チーノを今は不適切にも最後に挙げたが、そうすることが適切な理由により避けられなかったのである」(DVE, I, xiii, 4: Sed quanquam fere omnes Tusci in suo turpiloquio sint obtusi, nonnullos vulgaris excellentiam cognovisse sentimus, scilicet Guidonem, Lapum et unum alium, Florentinus, et Cynum Pistoriensem, quem nunc indigne postponimus, non indigne coacti) を参照のこと。「味わいに富み優美で、かつまた高尚な」(DVE, II, vi, 4: et sapidus et venustus etiam et excelsus) 構文を用いてすぐれたカンツォーネを詠んだ詩人たちが、『俗語詩論』第2巻6章6には、その作品とともに挙げられているが、リストはカヴァルカンティの *Poi che di doglia*、チーノの *Avegna che io aggia*、ダンテの *Amor che ne la mente* によって締めくくられている。また、同書第2巻12章3では、11音節詩行だけによって構成された聯の作例として、カヴァルカンティおよびダンテからの引用はあるが、チーノからのものはない。同じことが、「悲劇的文体」における3音節詩行の使用(他の長さの詩行の一部として、行中韻を踏む形での使用は許される)を論じた同書第2巻12章8においても生じている。

むしろ、不可解なのは『神曲』（「地獄篇」第10歌）におけるダンテのカヴァルカンティに対する評価と言えるかもしれない。まず第1に、カヴァルカンティの「高き才知」（Inf. X, 59: *altezza d'ingegno*）は承認されているが、それを口にするのはカヴァルカンティの父親であって、主人公「私」＝ダンテではない。また、カヴァルカンティの父に対する「私」のこトば——Inf. X, 61-63: *Da me stesso non vegno: / colui ch'attende là, per qui mi mena / forse cui Guido vostro ebbe a disdegno* ——は「私自らの力によって来たのではありません。あそこでお待ちのあの方（＝ウェルギリウス）が、ここ（＝地獄）を通して私を導いてくださるのですが、あなたの子息ガイドはおそらくその方を蔑んでおられた」と解釈するのがもっとも自然だと思われるが、その場合、カヴァルカンティがウェルギリウスをいかなる意味において軽んじたのか判然としない。『キタ・ノワ』第25章でダンテが「第一の友」カヴァルカンティとともに主張する修辞の合理的使用は、ウェルギリウスほか古典詩人たちの実践に倣うものとして正当化されていることを思い合わせるならば、カヴァルカンティのウェルギリウスに対する「軽蔑」は一層不可解である。さらに、『神曲』のあの世巡りの旅の設定（1300年春）ではカヴァルカンティはまだ他界していないにもかかわらず、「私」がなにゆえ遠過去を用いて“*ebbe a disdegno*”と死をほのめかすような表現をしたのかも明確ではない（実際、この遠過去のせいで、カヴァルカンティの父は息子の生存に疑念を抱く）。もちろん「地獄篇」第10歌が実際に執筆された時点（1304年以降）ではカヴァルカンティはすでに故人であり、ダンテはカヴァルカンティとの交際をすでに終わったこととして過去に委ねてしまいたかつたのであろうか。『神曲』のウェルギリウスには、『キタ・ノワ』第25章での「文体のモデル」とは異なった、キリスト教的・神学的意味が負わされているとするならば、「あそこでお待ちのあの方が、ここを通して私を導いてくださる」は一種の掛詞であって、「あそこ」はウェルギリウスが立っている場所と同時に神の玉座たる至高天を指し、「あのお方」はウェルギリウスと同時に神をも意味することが可能かと思われるが（ウェルギリウスは神意を実現するための「道具」であって、「道具」を動かす「手」としての神が不即不離の関係で結びついている）、その場合、カヴァルカンティの軽蔑は神に向けられたものともなる。神に対する軽蔑が魂の不滅を否定することを意味するならば、それはカヴァルカンティを父親と同じ地獄の場所に導くことになるが、「私」のこトばはそのことを暗示しているのであろうか。因みに、『デカメロン』第6日9話はカヴァルカンティを「エピクロス派の考え」（VI, 9, 9: *opinione degli epicurei*）を抱く者としている。

また、「煉獄篇」第11歌97-99が表わしているとされる、ダンテのカヴァルカンティに対する評価については、本章註29を参照のこと。

25) ダンテの死を悼むチーノのカンツォーネ *Su per la costa* (PD, II, pp.689-90; *Poeti del*

- Dolce stil nuovo*, a cura di M. Marti, Firenze, Le Monnier, 1969, pp.861-64)が残っている。
- 26) Cfr. G. Gorni, *Lettere nome numero*, Bologna, Il Mulino, 1990, pp.53-54; *Dante prima della Commedia*, Fiesole (Firenze), Cadmo, 2001, p.35.
- 27) Rim. 52 (CXIV).
- 28) DVE, I, xv, 6.
- 29) Purg. XI, 97-99: così ha tolto l'un all'altro Guido / la gloria della lingua; e forse è nato / chi l'uno e l'altro caccerà dal nido = 「同様にして、一方のガイドが他方のガイドから詩人の栄誉を奪った。だが、おそらくは両方を巣から放逐する者が生まれた」の前半部は、通常、カヴァルカンティがグイニツェッリに代わって詩人としての名声を享受したと解釈されている。この解釈では、「煉獄篇」のこの一節にはダンテがグイニツェッリに下した唯一の否定的評価を含んでいることになるが、ここで問題とされている2人のガイドとは、グイットーネとグイニツェッリであり、グイニツェッリがグイットーネから詩人の名声を奪取したことが述べられているとする解釈もある。この後者の解釈を支持するものとしては、M. Ciccutto, *Reperti allusivi nel Canto XXIV del Purgatorio*, in Id., *Il restauro de «L'Intelligenza» e altri studi dugenteschi*, Pisa, Giardini, 1985, pp.123-38 (alle pp.128-29, n.14); M. Picone, “*Vita Nuova*” e tradizione romanza, Padova, Liviana, 1979, p.32 (n.7); Id., *Guittone, Guinizelli e Dante*, in L. Rossi - S. Alloati Boller (a cura di), *Intorno a Guido Guinizelli*, Alessandria, Ed. dell'Orso, 2002, pp.69-84 (a p.84, n.22); G. Gorni, *Dante e Guittone*, in M. Picone (a cura di), *Guittone d'Arezzo nel settimo centenario della morte*, Firenze, F. Cesati, 1995, pp.309-335 (alle pp.327-28) などがある。
- 30) Purg. XXVI, 97-99: il padre / mio e delli altri miei miglior che mai / rime d'amore usar dolci e leggiadre.
- 31) A. Antonelli, *Nuovi documenti sulla famiglia Guinizelli*, in F. Brugnolo e G. Peron (a cura di), *Da Guido Guinizelli a Dante: nuove prospettive sulla lirica del Duecento*, Padova, Il Poligrafo, 2004, pp.59-105 (alle pp.80-89) によれば、グイニツェッリは1220年代に生まれ、1276年11月にはすでに故人となっていた。
- 32) Picone, *Guittone, Guinizelli e Dante* cit. がすでにこの試みに挑戦し、問題が残されているにせよ、きわめて合理的な再構築を行なっている。
- 33) PD, II, p.481. ボナジュンタに対して、グイニツェッリは回答のソネット *Omo ch'è saggio* (PD, II, pp.482-83) を書き送っているが、真正面から自己弁護をするのではなく、むしろさまざまな文体の可能性をゆるやかに養護しているように読める。

Omo ch'è saggio non corre leggero,
ma a passo grada sì com' vol misura:

quand' ha pensato, riten su' pensiero
infin a tanto che 'l ver l'asigura.

Foll'è chi crede sol veder lo vero
e non pensare che altri i pogna cura:
non se dev'omo tener troppo altero,
ma dé guardar so stato e sua natura.

Volan ausel' per air di straine guise
ed han diversi loro operamenti,
né tutti d'un volar né d'un ardire.

Dëo natura e 'l mondo in grado mise,
e fe' despari senni e intendimenti:
perzò ciò ch'omo pensa non dé dire.

賢明な者は軽率に走らず、節度を守って一步一步進んでゆく。自分の考えをまとめると、それが真実に違っていないと確証されるまでは、明かさない。他の者も真を捉えようと骨折っていることを考えもせず、ただ自分一人が真実を理解していると思ひこむ者はなんと愚かなことだろう。人は自分をあまりに高く評価せず、むしろ自分の境遇と本性をよく見つめるべきだ。鳥はさまざまな仕方で空を飛び交い、種々の活動を行なっている。皆が同じ飛び方をするのではなく、気性の激しさも一様ではない。神は自然と世界に階梯を設けられ、さまざまな度合の分別や知性を創られた。それゆえ、人は自分の考えを（軽率に）言うべきではないのだ。

- 34) 諸研究者の見解のまとめとしては、cfr. G. Guinizzelli, *Rime*, a cura di L. Rossi, Torino, Einaudi, 2002, pp.75-77 が、もっとも網羅的であろう。
- 35) 拙論「ひとつの試み——『キタ・ノワ』の章分けをめぐる」、『ルネサンスにおける自然観の総合的研究』、平成 9-12 年度科学研究費補助金補助金、基盤研究 (B) (1) 研究成果報告書 (課題番号 09410001)、2001 年、166-277 頁に所収の『キタ・ノワ』試訳 [一九] (204-06 頁) のうち、「若干の不得手な者たち」、「俗語詩人として詩作」、「詩人たちは理由もなく」の各書き出しで始まる部分をとくに参照されたい。
- 36) PD, I, pp.214-17.
- 37) 拙論「ペトラルカ『カンツォニエーレ』への補註——73 番 67-82、その他」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学大学院人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要) III、2006 年、71-154 頁、とりわけ註 44 (144 頁) を参照のこと。
- 38) DVE, I, xiii, 1: puta Guittonem Aretinum, qui nunquam se ad curiale vulgare direxit. “curiale” の概念については、拙論「ダンテとイタリア文学の創造」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学大学院人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要) II、2002 年、145-64 頁 (とくに 150-51 頁) 参照。
- 39) DVE, II, vi, 8: Substant igitur ignorantie sectatores Guictonem Aretinum et quosdam

alios extollentes, nunquam in vocabulis atque constructione plebescere desuetos.

40) PD, II, p.484.

41) Cfr. PD, II, p.484 (nota); M. Papahagi, *Guido Guinizzelli e Guittone d'Arezzo: contributo a una ridefinizione dello spazio poetico predantesco*, in M. Picone (a cura di), *Guittone d'Arezzo nel settimo centenario della morte* cit., pp.269-93 (pp.284 sgg. in particolare); Picone, *Guittone, Guinizzelli e Dante* cit., pp.75-76; G. Guinizzelli, *Rime*, a cura di L. Rossi, cit., pp.XXVI-XXVII. グイニツヅェッリがグイットーネの「添削」に委ねたカンツォーネを推定することに対し、グイットーネの回答のソネット *Figlio mio diletto* (PD, II, p.485) は有益な情報をまったく与えてくれない。参照のために、*Figlio mio diletto* を以下に掲げておく。

Figlio mio diletto, in faccia laude
non con descrezion, sembrame, m'archi:
lauda sua volonter non saggio l'aude,
se tutto laudator giusto ben marchi;
per che laudar me te non cor me laude,
tutto che laude mertì e là u' de' marchi:
laudando sparte bon de valor laude,
legge orrando di saggi e non di marchi.

Ma se che degno sia figlio m'acorgo,
no amo certo guaire a.tte dicimi,
ché volonteri a la tua lauda accorgo.

La grazia tua che 'padre' dicimi,
ch'è figlio tale assai pago, corgo,
purché vera sapienzia appoder cimi.

親愛なるわが子よ、軽率にもおまえは私の顔に向かって賞讃を（矢のように）放っているようだ。賞讃する者がどれだけ正しく的を得ていても（＝賞讃がどれだけ正当で的外れでないとしても）、自分に向けられた賞讃のことは喜んで聞くのは愚か者だ。だから、たとえおまえが打つべきところを打ち賞讃に値するとしても、私がおまえを讃えることを、私の心はよしとしないのである。愚か者ではなく賢者の掟に敬意を表してしたがうならば、賞讃のことは、まさに賞讃によって、有徳の者を徳から遠ざけてしまうからである。しかし、おまえが立派な息子であることに私は気づいているから、おまえを拒むことを私はまったく好まない。そして喜んでおまえの賞讃に駆け寄り（＝を受けとる）。息子がこのように立派であることに私はすっかり満足して、私を「父」と呼んでくれたおまえの親切を受け容れる。ただ力の限りおまえが真の知恵を育ててくれるならば。

42) たとえば、E. Sanguineti, *Per forza di scrittura*, in G. Guinizzelli, *Poesie*, Milano,

Mondadori, 1986, pp.VII-XXII (alle pp.VII-XIII) は、グイニッツェッリの「丁重さ」の真面目さを疑問視し、「丁重さ」の裏にグイットーネに対して距離を置こうとしている詩人の姿を見ている。

- 43) Purg. XXVI, 73-75: Beato te, che delle nostre marche, -- / ... / -- per morir meglio, esperienza imbarche! = 「よき最期を迎えるために、われらの住処の体験を積んでゆくおまえは、幸いなるかな。」
- 44) Cfr. PD, II, pp.447-48; G. Guinizzelli, *Poesie*, a cura di E. Sanguineti, Milano, Mondadori, 1986, p.83.
- 45) P. G. Beltrami, *La metrica italiana*, Bologna, Il Mulino, 1991, p.237.
- 46) Giacomo da Lentini, *Poesie*, a cura di R. Antonelli, Roma, Bulzoni, 1979 および G. Guinizzelli, *Rime*, a cura di L. Rossi, cit. が真作とするソネットを分析対象とした。
- 47) *Rimatori siculo-toscani del Dugento*, a cura di G. Zaccagnini e A. Parducci, Bari, Laterza, 1915, pp.49-93 をテキストとして、真作とされるもののみを分析対象にする。
- 48) *Le rime di Guittone d'Arezzo*, a cura di F. Egidi, Bari, Laterza, 1940 をテキストとして分析を行なった。
- 49) その他の内訳は、14 の 11 音節詩行の間に 7 音節詩行は差し挟んだもの (ソネット・ドッピオ、ソネット・リンテルツアート) 23、前半部が 8 行ではなく 10 行からなるもの (モンテ・アンドレーアが愛好した形式) 4、ABAB/BAAB のパターンで押韻するもの 1、ABAA/BBBA のパターンで押韻するもの 1 である。その他の形式は、いずれも、出家後のグイットーネの作品に観察される。これに対して、出家前の 138 のソネットはすべて ABAB/ABAB の形式で書かれている。
- 50) G. Cavalcanti, *Rime*, a cura di D. De Robertis, cit. をテキストとして、真作とされるものを分析の対象にした。
- 51) *Le opere di Dante*, a cura di M. Barbi et al., Firenze, Bemporad, 1921 をテキストに真作とされるものを分析の対象とした。
- 52) その内訳は、すべて、14 の 11 音節詩行の間に 7 音節詩行は差し挟んだもの (ソネット・ドッピオ、ソネット・リンテルツアート) となっている。
- 53) *Poeti del Dolce stil nuovo*, a cura di M. Marti, Firenze, Le Monnier, 1969, pp.421-923 をテキストとして、真作とされるもののみを分析の対象とした。
- 54) その内訳は、ABAB/BABA のパターンで押韻しているもの 6、AbBa/AbBa (小文字は 11 音節詩行) のパターンで押韻しているもの 1、aBbA/aBbA のパターンで押韻しているもの 1 となっている。
- 55) F. Petrarca, *Canzoniere*, a cura di M. Santagata, Milano, Mondadori, 2004 をテキストに分析した。
- 56) その内訳は、ABAB/BABA のパターンで押韻するもの 2、ABAB/BAAB のパター

ンで押韻するもの2となっている。

- 57) 前掲拙論「ひとつの試み——『キタ・ノワ』の章分けをめぐる」に所収の『キタ・ノワ』試訳に付された註（とりわけ72、87など）を参照のこと。
- 58) PD, II, p.468. 因みに、拙論「ペトラルカ『カンツォニエーレ』への補註——73番67-72、その他」、129-31頁は、グイニツェッリのこの作品、*Lo vostro bel saluto*の末尾3行と、カヴァルカンティのソネット *Tu m'ha sù piena* の末尾6行、『キタ・ノワ』第11章3、およびペトラルカ『カンツォニエーレ』第94番 (*Quando giugne per gli occhi*) 冒頭4行の比較を行なっている。
- 59) PD, II, p.472.
- 60) Pier della Vigna, *Amando con fin core*, v.16, in PD, I, p.126. ピエル・デッラ・ヴィツニヤのこの作品では、“albore”は“amore”, “amarore”, “tuttore”と押韻している。
- 61) G. Guinizzelli, “Vedut’ho la lucente stella diana, / ch’apare anzi che ’l giorno rend’ albore”, in PD, II, p.469. グイニツェッリのこのソネットでは、“albore”は“splendore”, “amore”, “valore”と押韻し、ピエル・デッラ・ヴィツニヤの場合と押韻語“amore”を共有しているが、‘-ore’は選択肢が多い比較的簡単な韻である。参照のために、*Vedut’ho la lucente*の全文を以下に掲げておく。

Vedut’ho la lucente stella diana,
 ch’apare anzi che ’l giorno rend’ albore,
 c’ha preso forma di figura umana;
 sovr’ ogn’ altra me par che dea splendore:
 viso de neve colorato in grana,
 occhi lucenti, gai e pien’ d’amore;
 non credo che nel mondo sia cristiana
 sì piena di biltate e di valore.

Ed io dal suo valor son assalito
 con sì fera battaglia di sospiri
 ch’avanti a lei de dir non serì’ ardito.

Così conoscess’ ella i miei disiri!
 ché, senza dir, de lei seria servito
 per la pietà ch’avrebbe de’ martiri.

私は明けの明星を見た、朝が光をもたらす前に現われるあの星を。その星は人の形になり、ほかのどんな星（＝婦人）よりも光彩を放って出現した。紅で染めた雪の顔、楽しいで愛に満ちた輝く目。この世にこれほどまでに美と価値に満ちた婦人はあるまい。彼女の価値に打たれ、溜息の激しい苦しみに見舞われたから、私には彼女の前で告白する勇気がない。ああ彼女が私の願いを知っていたらいいのに。そうすれば、言わなくとも、彼女は苦しみを憐れんでくれて、私は報われるのに。

- F. Brugnolo, “Parabola” di un sonetto del Guinizelli: «Vedut’ho la lucente stella diana», in AA.VV., *Per Guido Guinizelli*, Padova, Antenore, 1980, pp.53-105 は、グイニツェッリの上記ソネットと「テキスト相互性」(intertestualità)によって結ばれている作品(主としてソネット)の興味深いアンソロジーを含んでいる(92-95頁)。
- 62) 別の写本(Vaticano Barberino Latino 3953)は、このソネットをモナルド・ダクイーノ(Monaldo d’Aquino)の作としており、Giacomo da Lentini, *Poesie*, a cura di R. Antonelli, cit., p.400 は帰属が曖昧な作品として扱っている。
- 63) PD, I, p.255. Cfr. *Le rime di Guittone d’Arezzo*, a cura di F. Egidi, cit., p.194.
- 64) PD, II, p.460 (nota).
- 65) PD, II, pp.460-64. コンティニーニ版テキストは、45行目の冒頭を“e con’ segue”としているが、ここでは“e consegue”と改めた。コンティニーニ自身がそのようにも読めると指摘していることを考慮した結果である。Cfr. G. Contini, *Letteratura italiana delle origini*, Firenze, Sansoni, 1970, p.155 (n.29).
- 66) 第5聯の解釈に関しては、基本的にコンティニーニの説明にしたがった(PD, II, p.463, nota)。Marti (a cura di), *Poeti del Dolce stil nuovo* cit., p.61 (n.3) および P. Pelosi (a cura di), G. Guinizelli, *Rime*, Napoli, Liguori, 1998, p.41 (nota) はコンティニーニの解釈を受け容れているが、Sanguineti (a cura di), G. Guinizelli, *Poesie* cit., p.32; Rossi (a cura di), G. Guinizelli, *Rime* cit., p.37 (nota); R. Antonelli, *Dal Notaro a Guinizelli*, in Brugnolo e Peron (a cura di), *Da Guido Guinizelli a Dante* cit., pp.107-46 (alle pp.144-45) はコンティニーニの解釈を部分的に修正し、47行目のdar(e)の直接補語を“beato compimento”(実際は、反復を避けるために省略されている)と考え、48行目“splende”の主語を後続の“talento”だとしている(ただし、49行目の“gentil talento”が「高貴な願い」を意味するひとまとまりのシンタグラマをなすのではなく、“gentil”が「高貴な恋人」の意味で名詞化されていると考える点ではコンティニーニと一致)。コンティニーニの読みに対する最近の修正としては、M. Picone, *Guinizelli nel Paradiso*, in Brugnolo e Peron (a cura di), *Da Guido Guinizelli a Dante* cit., pp.341-54 (alle pp.350-53) がとくに興味深いが、ピコーネは49行目“del suo gentil talento”をまとめて、“dar(e)”の省略されている直接補語“beato compimento”に結びつけようとする(その結果として、48行目“splende”の主語は同じ行の“la bella donna”と考え、“splende”の後ろには読点・コンマを補足することが必要となろう)。ピコーネの提案のもう1つの特徴は、50行目冒頭の“che”がイタリア北部的な表現であり、実際には“chi”に対応し、文脈上は間接補語的な役割を帯びて動詞“dar(e)”に結びつくとしている点であろう(前出アントネッリも、“che”に対する同じ解釈を示している)。
- 67) Cfr. D’A. S. Avalle, *Ai luoghi di delizia pieni: saggio sulla lirica italiana del XIII secolo*, Milano-Napoli, Ricciardi, 1977, p.36.

- 68) Picone, *Guittone, Guinizzelli e Dante* cit., pp.76-78. ピコーネはまた、グイニッツェッリがグイットーネの「添削」に委ねたカンツォーネは *Al cor gentil rempaira* だと推定している (73-76 頁)。
- 69) Giacomo da Lentini, *Poesie*, a cura di R. Antonelli, cit., pp.11-15.
- 70) I. Bertelli, *La poesia di Guido Guinizzelli e la poetica del «Dolce Stil Nuovo»*, Firenze, Le Monnier, 1983, p.55; C. Giunta, *La poesia italiana nell'età di Dante: la linea Bonagiunta - Guinizzelli*, Bologna, Il Mulino, 1998, pp.177-78; F. Brugnolo, *Spunti per un nuovo commento a Guinizzelli*, in Rossi - Alloatti Boller (a cura di), *Intorno a Guido Guinizzelli* cit., pp.37-56 (alle pp.45-48); Rossi (a cura di), G. Guinizzelli, *Rime* cit., pp.18-19; Antonelli, *Dal Notaro a Guinizzelli* cit., pp.107-08.
- 71) G. Contini, in PD, II, p.447: ... è di gusto ancor più siciliano che guittoniano.
- 72) = dipingere?, spingere? グイニッツェッリが *spingere* の意味で書いたならば、おそらくは Arnaut Daniel, *En cest sonet coind'e leri*, vv.43-45 (in A. D., *Canzoni*, a cura di G. Toja, Firenze, Sansoni, 1960, p.274): Ieu sui Arnautz q'amas l'aura, / e chatz la lebre ab lo bou / e nadi contra suberna = 「私はアルナウト、空気を積み重ね、牛で兎を追いかけ、上げ潮に抗って泳ぐ者」を意識しながら表現したのであろう。Cfr. Brugnolo, *Spunti per un nuovo commento a Guinizzelli* cit., pp.47-48. グイニッツェッリが "dipingere" の意味で書いたのであれば、おそらくはジャコモ *Madonna, dir vo voglio* の 42 行目「描く」(pinge) および 46 行目「絵画」(pintura) と関連づけられねばなるまい。
- 73) PD, II, pp.457-59. テキストには一部改変を加え、44 行目末のコンマを省いた (コンティーニのテキストでは、"... fare,")。
- 74) 註 70 に掲げた先行研究の成果に、新たな提案を加えて対応関係を以下にまとめておく。まずジャコモ *Madonna, dir vo voglio* の語彙・シンタグラマを行数とともに掲げ、ハイフンを挟んで、続いてグイニッツェッリ *Donna, l'amor mi sforza* の対応する語彙・シンタグラマを行数とともに掲げる。セミコロンを置いて、対応関係の指摘を同じ手続きで継続する。リストには、本文中で言及する機会のあるものは原則として含めないこととする。

che 'n tante pene è miso (6) - e miso a tempestare (24); che vive quando more (8) - ca more di pietate (10); mi consuma (26) - consomar lo faite (11); 'nfra lo foco (28) - in gran foch' e 'n ardore (12); lo meo lavoro spica e non ingrana (32) - lavoro e non acquisto (51) [グイニッツェッリは、ジャコモの lavoro の外形を借用しつつも意味を変更しながら活用しているものと思われるが、Brugnolo, *Spunti per un nuovo commento a Guinizzelli* cit., p.46 は、グイニッツェッリ 51 行目をジャコモに引き寄せ「種は播けども、収穫はできず」と解釈することを提案している]; pinge (42), pintura (46) - pinger(e) l'air(e) (48-49); omo che cade in mare (48) - che non perisca in

mare (21); e campan per lo getto (53) - como possa campare (20); li miei sospiri e pianti (56), sospiro e piango (64) - in lagrime ed in doglie (36); com'eo so' innamorato (67) - di stare innamorato (57); Poi c'a me solo, lasso, / cotal ventura è data, / perché no mi 'nde lasso? (69-71) - Lasso, ch'eo fui dato! / [...] / fu' i' però sol nato (52-56); cotal ventura (70), fortuna (52) - ventura (18); meo core ... 'ncarnato tutto (74-75) - incarnato amore (9); c'Amore a tal l'aduse (77) - Amore a tal m'ha 'dutto (53); lo vederia (80) - l'ha visto (58)

- 75) Giacomo da Lentini, *Poesie*, a cura di R. Antonelli, cit., pp.342 e 352. とくに、[C]erto me par, vv.13-14: qual più ti [= Amore] serve a fé, quel men ài caro, / ond'eo t'aprovo per signor felone = 「誰がおまえに忠実に仕えても、忠実に仕えれば仕えるほど、おまえはその者を蔑む。ゆえに、私はおまえを不実な主人と宣告する」および [C]hi non avesse, vv.12-14: Certo l'Amor[e] fa gran vilania, / che no distringe te che vai gabando, / a me che servo non dà isbaldimento = 「確かに、愛神は大いに恥ずべきことをしている。擲揄し続けるおまえを苦しめることはないのに、奉仕する私には喜びをあたえてくれないのだから」を参照のこと。
- 76) Brugnolo, *Spunti per un nuovo commento a Guinizelli* cit., p.45.
- 77) Giacomo da Lentini, *Poesie*, a cura di R. Antonelli, cit., p.338.
- 78) Brugnolo, *Spunti per un nuovo commento a Guinizelli* cit., p.45. 本文の以下の部分に続く、“audivi”および“s'astingue”の「材源」に関する情報も、やはりブルニョーロの研究（同所）が指摘したことである。
- 79) Antonelli, *Dal Notaro a Guinizelli* cit., pp.130-31, 33.
- 80) PD, II, p.455.
- 81) PD, I, p.110.
- 82) 「賢者らは語る」（contano i saccenti）は、本文中で論じた「私は聞いた」（audivi）の一変奏であろう。
- 83) Antonelli, *Dal Notaro a Guinizelli* cit., p.107.
- 84) C. Giunta, *La poesia italiana nell'età di Dante: la linea Bonagiunta - Guinizelli* cit., pp.75-178 (in particolare). また、A. Cipollone, *I quattro sensi della scrittura di Bonagiunta: ancora sulla tenzone con Guinizelli*, in Rossi - Alloatti Boller (a cura di), *Intorno a Guido Guinizelli* cit., pp.99-135 も結論としては、ボナジュンタ - グイニッツェリ間の「論争」の意味を見直すことに賛同している。
- 85) PD, I, pp.272-73. コンティエーニのテキストの若干の変更を加え、3行目は“vincela”ではなく“vince là”と読み、12行目は“cera, vede”ではなく、“cera veda”と読んだ。また、14行目の“conven, la”は句読点を省いて“conven la”とした。
- 86) Cfr. PD, I, p.272 (nota).
- 87) Cfr. PD, I, p.260 (nota).

- 88) Cfr. PD, I, p.260 (nota).
- 89) PD, I, p.430. Cfr. C. Davanzati, *Rime*, a cura di A. Menichetti, Bologna, Commissione per i testi di lingua, 1965, p.385; C. Davanzati, *Canzoni e sonetti*, a cura di A. Menichetti, Torino, Einaudi, 2004, pp.189-90.
- 90) C. Davanzati, *Canzoni e sonetti*, a cura di A. Menichetti, cit., p.188.
- 91) PD, I, pp.126-28.
- 92) Giacomo da Lentini, *Poesie*, a cura di R. Antonelli, cit., pp.309-10.
- 93) = riconoscenza?
- 94) PD, II, pp.453-56.
- 95) PD, I, pp.107-10.
- 96) PD, I, pp.104-06.
- 97) PD, I, pp.260-62.
- 98) PD, I, pp.102-03.

(うら かずあき / 2007 年度原稿)

執筆者紹介

浦 一章 准教授
古田 耕史 博士課程学生

編集委員

浦 一章・長神 悟

イタリア語イタリア文学 第4号 (2008)

2008年4月30日 印刷

2008年5月1日 発行

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
南欧語南欧文学研究室 浦 一章
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
TEL 03 (5841) 3851 FAX 03 (5802) 8870
